鳥取県教育文化財団調査報告書　92

一般国道313号道路改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡北条町

中浜遺跡

2004

財団法人　鳥取県教育文化財団

一般国道313号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
鳥取県教育文化財団調査報告書92　『中浜遺跡』正誤表

頁	誤	正
7頁　28行目	粘性の極めて強いシルト質で	粘性の極めて強い粘質土で
12頁　13行目	…埋没であった可能が高い	…埋没であった可能性が高い
写真図版目次	1．畝状遺構（南から）	1．畝状遺構（北から）
PL.. 3	1．畝状遺構（南から）	1．畝状遺構（北から）

鳥取県教育文化財団調査報告書　92

一般国道313号道路改良工事に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡北条町

中浜遺跡

2004

財団法人　鳥取県教育文化財団

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、一般国道313号道路（北条倉吉道路）の改良工事が着々と進められているところでありますが、当財団は、鳥取県からの委託を受け、北条町の島古墳群などの埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

今年度は、北条町にある中浜遺跡で、古墳時代の竪穴建物跡や「山陰型甑形土器」と呼ばれる山陰地方特有の遺物が完全な形で確認されるなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができ、このたび調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、中部総合事務所県土整備局や地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　有田　博充

例　言

1．本書は、平成15年度に行った「一般国道313号の改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査事業」による中浜遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地は以下のとおりである。
鳥取県東伯郡北条町弓原字中浜738-1、738-２、744-1、746-1、753-1、756-1

3．本報告書で示す標高は、KBM.３（標高11.015m）を基点とする標高値を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、座標北に対し磁北は6°27′25″西偏、真北は0°22′35″東偏する。
Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。

4．本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「倉吉」及び「北条町都市計画図」(1/2,500）を使用した。

5．本報告にあたり、出土石製品の石材鑑定を赤木三郎氏に依頼した。

6．本報告書の執筆・作成は、君嶋俊行、田村昭夫、鈴木恵介が分担し、目次と各文末に文責を記した。編集は君嶋が行った。

7．本報告書に使用した遺構・遺物写真は、航空写真を除いて調査担当者が撮影した。

8．本報告にあたり、調査前航空写真撮影、調査前地形測量、基準点測量を業者に委託した。

9．出土遺物、図面、写真等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

10．現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に御指導、御協力いただいた。記して謝意を表する次第である。
赤木三郎、清水直樹、福庭克展、星見清晴、八峠　興　　（五十音順、敬称略）

凡　例

1．本報告書で用いた遺構・遺物の略号は以下のとおりである。
ＳＩ：竪穴建物跡、ＳＫ：土坑・土壙、ＳＤ：溝、ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＡ：柵列、Ｐ：柱穴
Ｓ：石製品　（記号のないものは土器・土製品・陶器）

2．遺構・遺物実測図に用いたスクリーントーン及び記号は、特に説明がない限り以下のものを表す。

地山　　赤彩範囲　　●・・・土器・土製品出土位置

3．遺物実測図において、須恵器は断面黒塗り、それ以外の土器・土製品は白抜きで表現した。

4．法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

5．一般的に「竪穴住居」と呼ばれる遺構については、その機能を住居のみに限定できないとの認識から、本報告書では「竪穴建物」の名称を使用する。また、回転台上で製作された酸化炎焼成の土器については、「土師質土器」の名称を使用する。

6．本報告書における土器類の編年・年代観は基本的に以下の文献に拠る。
牧本哲雄　1999　「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第６遺跡』 鳥取県教育文化財団
巽淳一郎　1979　「Ⅲ 遺物 ２ 土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報(第５･６次)』 倉吉市教育委員会

目　次

序
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯 ……（君嶋）1
　第１節　調査に至る経緯 ……1
　第２節　調査の方法と経過 ……2
　第３節　調査体制 ……3
第２章　遺跡の位置と環境 ……4
　第１節　地理的環境……（田村）4
　第２節　歴史的環境……（鈴木）5
第３章　発掘調査の成果 ……7
　第１節　遺跡の立地と層序……（君嶋）7
　第２節　第１遺構面の調査……（鈴木）11
　第３節　第２遺構面の調査……（君嶋・鈴木）12
　第４節　包含層出土の遺物……（君嶋）19
第４章　まとめ……（君嶋・田村・鈴木）22

出土遺物（土器・土製品）観察表 ……21
出土遺物（石器・石製品）観察表 ……22
写真図版目次
写真図版

挿図目次

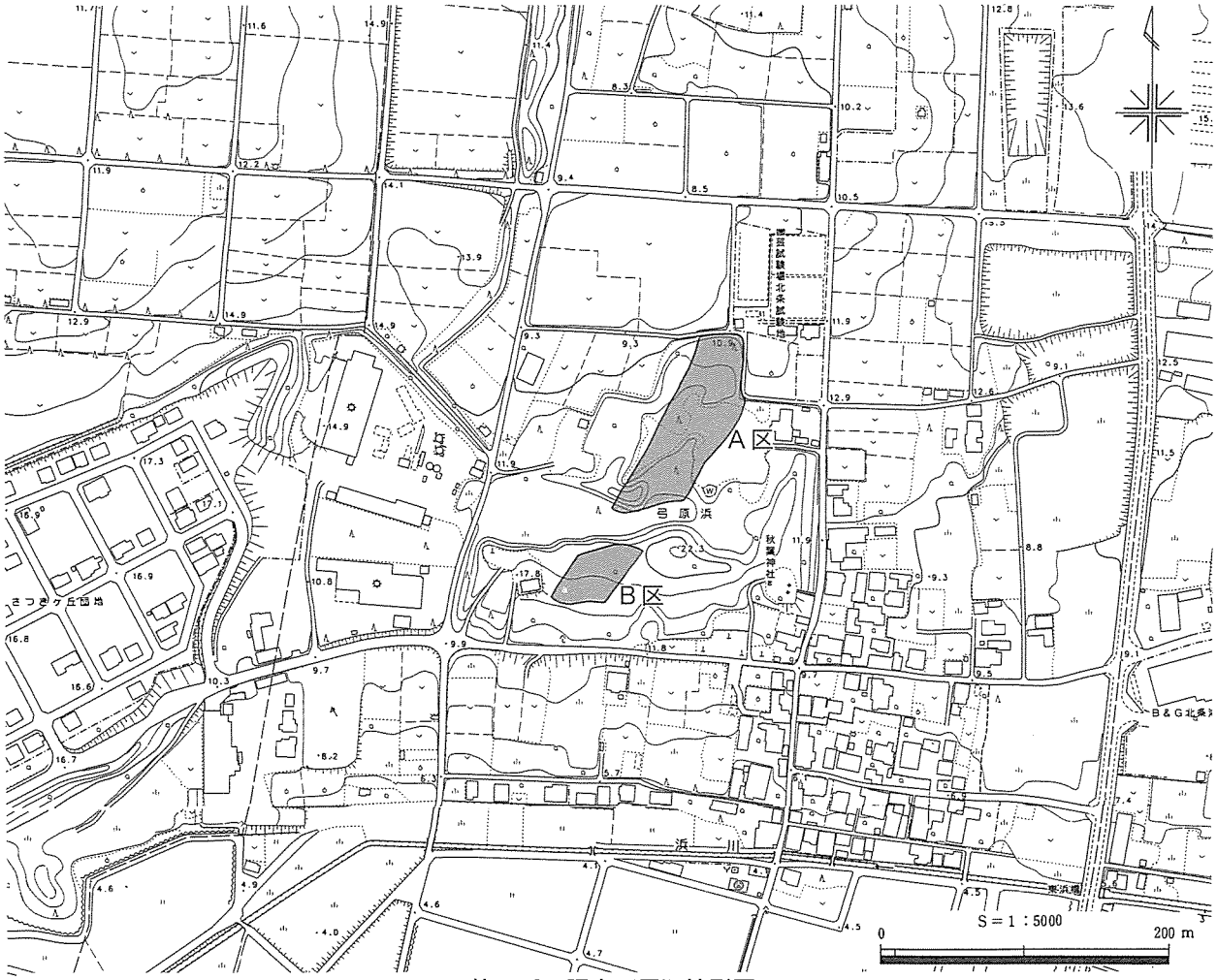
第１図　調査区周辺地形図……1
第２図　遺跡位置図……4
第３図　周辺遺跡分布図……6
第４図　調査区周辺地質推定平断面図……8
第５図　A区層序模式図 ……8
第６図　調査前地形測量図……9
第７図　調査区全体図……10
第８図　B区遺構全体図……11
第９図　畝状遺構……12
第10図　SI１・２……13
第11図　SI１出土遺物……14
第12図　SI３……15
第13図　SB１ ……15
第14図　SB２ ……15
第15図　SB３ ……15
第16図　SB５ ……16
第17図　SB４ ……16
第18図　SA１ ……16
第19図　SA１出土遺物 ……16
第20図　SD１ ……17
第21図　SD２ ……17
第22図　SK１ ……18
第23図　SK２ ……18
第24図　SK３ ……18
第25図　SK４ ……18
第26図　SK出土遺物 ……18
第27図　A区ピット群全体図……19
第28図　ピット群出土遺物……19
第29図　包含層出土遺物……20

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道313号道路の改良工事を原因とし、北条町内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録の作成を目的としたものである。一般国道313号道路は、北条町内において一般国道９号線（北条バイパス）から分岐して倉吉市に入り、関金町犬挟（いぬばさり）峠を経て岡山県に至る地域高規格道路である。この道路の計画路線にあたる北条町弓原地内の丘陵地では、過去の砂利採取の際に遺構及び遺物が確認されており、周知の遺跡「中浜遺跡」として「北条町遺跡地図」に登録されている。そのため工事に先立ち、北条町教育委員会による試掘調査及びボーリング調査が平成13・14年度に行われた[註]。その結果、土師器などの遺物が出土し、遺跡の範囲が確定された。この結果を受け、鳥取県倉吉地方県土整備局は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議を行い、鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第57条の３に基づく発掘通知を行った。その上で、記録保存のための事前発掘調査の通知を受けた倉吉地方県土整備局は、発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。これにより、鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター所長から鳥取県教育委員会教育長に、文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出した。調査は、平成15年度に埋蔵文化財センター東伯調査事務所が担当した。調査面積は10,194㎡である。　　（君嶋）

註）清水直樹編　2002　『町内遺跡発掘調査報告書　第11集』北条町埋蔵文化財報告書31、北条町教育委員会
　　福庭克展編　2003　『町内遺跡発掘調査報告書　第12集』北条町埋蔵文化財報告書32、北条町教育委員会



第１図　調査区周辺地形図

第２節　調査の方法と経過

（１）調査区の名称と調査方法

南北に細長い中浜遺跡の調査区は、過去の砂利採取によって中央やや南寄りで分断されており、これを境に北側をＡ区、南側をＢ区と呼称した。

表土（白色砂層）除去及び黒灰色土包含層の除去には重機を用い、それ以外の遺構の掘り下げは人力で行った。表土剥ぎ終了後、公共座標第Ｖ系に基づく10m間隔の基準杭を設定した。これらの杭には、南北軸には算用数字を、東西軸にはアルファベットを付し、「Ａ１杭」のように呼称した。また、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとってグリッド名とした。

検出した遺構・遺物の記録には光波トランシットを用いた。出土遺物のうち、時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構もしくはグリッド毎に一括して取り上げた。遺構の写真撮影には35㎜判と６×７判を、遺物の写真撮影には４×５判を用いた。

（２）調査の経過

Ａ・Ｂ両調査区のうち、Ｂ区の現況は墓地であり、改葬終了を待って調査を行うこととした。そのためＡ区より調査に着手した。調査開始に先立ち、４月２日から16日にかけて県土整備局発注の重機による表土剥ぎを行った後に、同17・18日に委託業者による基準点測量を行った。４月22日より黒灰色土上面である第１遺構面の遺構検出作業を開始した。第１遺構面では畝状遺構を検出した。黒灰色土は締り・粘性が極めて強く、人力での掘り下げが困難であったこと、また包含する遺物は細片であったことから、５月19・20日に重機を用いて除去した。５月21日より第２遺構面の遺構検出作業にとりかかり、竪穴建物跡、溝、土坑、ピット群を検出した。竪穴建物跡SI１では、５月23日に山陰型甑形土器の狭口部を検出した。掘り進めるうちに完形品であることが明らかとなり、図化・写真撮影を経て30日に取り上げた。Ａ区の調査は、SI１を除いて５月30日に終了した。

６月２日～12日の間、Ｂ区の改葬作業のため調査を中断した。６月13日より24日まで県土整備局発注の重機による表土剥ぎを行い、同25日に委託業者による基準点測量を行った。遺構検出作業は６月25日より開始した。Ｂ区で確認したのは第２遺構面のみであり、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、ピット群を調査した。また、Ａ区のSI１の調査も並行して行った。７月31日に現地での調査を終了した。

また、９月27日に行われた笠見第３遺跡（東伯町田越、東伯調査事務所が昨年度及び今年度調査）の現地説明会の際に、SI１から出土した山陰型甑形土器３点の展示・解説を行った。

発掘調査報告書の作成にともなう遺物の整理作業は東伯調査事務所で行った。整理作業及び報告書の作成は現地調査と並行して進め、平成15年度末をもって終了した。　（君嶋）

写真１　Ａ区　作業風景

写真２　Ｂ区　表土剥ぎ風景

第３節　調査体制

調査は、下記の体制で実施した。

○調査主体　**財団法人鳥取県教育文化財団**

理　事　長　　有田　博充
常務理事　　川口　一彦（兼・鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長　　下田　弘人

埋蔵文化財センター

所　　長　　田中　弘道（兼・鳥取県埋蔵文化財センター所長）
次　　長　　竹内　　茂
次　　長　　加藤　隆昭
調査課長（兼）　加藤　隆昭
企画調整班長　　山枡　雅美
　文化財主事　　下江　健太
庶務課長（兼）　竹内　　茂
　主任事務職員　　矢部　美恵
　事務職員　　田中　陽子　大川　秋子　植田　恵子（９月退職）
　　谷垣　真寿美　小谷　有里
　事務補助員　　山根　美代（11月採用）

○調査担当　**埋蔵文化財センター東伯調査事務所**

所　　長　　佐治　孝弐
班　　長　　牧本　哲雄
文化財主事　　君嶋　俊行
調　査　員　　田村　昭夫
　　鈴木　恵介（１月退職）
事務補助員　　大田　直子

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センター
○調査協力　北条町教育委員会

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中浜遺跡の所在する北条町は鳥取県中央部に位置し、東西約5.9km、南北約4.7km、面積20.92km²、人口8,067人（2003年11月現在）の町である。東は羽合（はわい）町に、西は大栄（だいえい）町に、南は倉吉市に隣接し、北は日本海に面している。町の東端には一級河川の天神川が、中央部には二級河川の北条川が流れている。また、町の中央をJR山陰本線が、海岸沿いを国道９号線が東西に通過し、南北には国道313号線が本町と倉吉市とを結んでいる。本町は、2004（平成16）年10月には大栄町と合併する予定である。

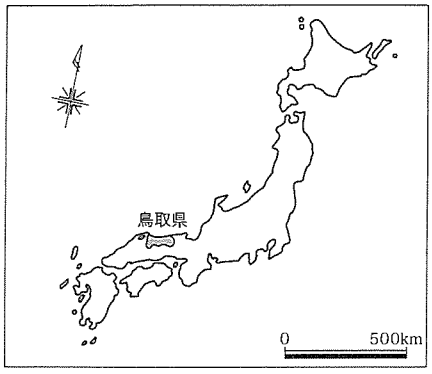
本町の地形は、北部海岸沿いの砂丘地、中央部の平野部、南部の丘陵地に分けることができる。北部の砂丘地帯は北条砂丘と呼ばれ、東は天神川の河口から西は大栄町大谷集落付近まで東西約12km、南北1.8km、面積1,100haにわたって発達した海岸砂丘である。更新世（200万～1.7万年）末期、古北条湾に浮かぶ島であった三輪山（標高33.9m）や茶臼山（標高94m）の周りに、中国山地の風化した花崗岩が砂となって堆積し、海面の上昇・低下を経て「古砂丘」が形成された。その後、大山（だいせん）の噴火（５万年前）により火山灰や軽石の堆積が繰り返された。完新世（１万年前）になり再び砂丘の形成が始まり、火山灰の上に「新砂丘」が形成された。弥生時代以降には、砂丘の成長が止まり、植物が生育してクロスナ（腐植質砂）を形成する時期もあったが、中世以降砂丘は再び発達した。現在は、ぶどう、ながいも、葉タバコ、ラッキョウなどの砂丘地農業が行われている。ぶどうからはワインを醸造し、北条町を代表する名産品となっている。しかし、天神川からの砂の供給が少なくなりつつあり、砂丘の現状を維持することが難しくなっている。

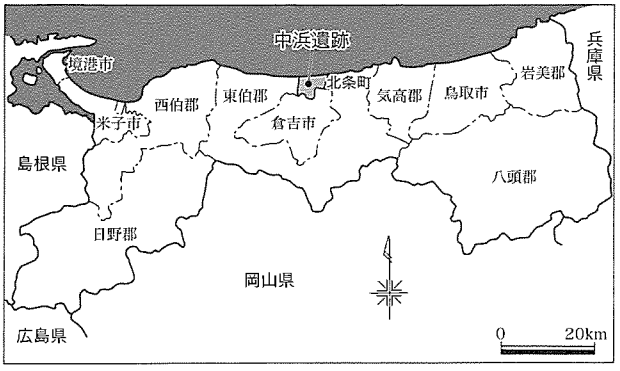
中央部の北条平野は、天神川によって形成された沖積平野である。高低差が少なく平坦な地域である。古くから北条田園とも呼ばれ、古代から条里制によって米作が行われてきた穀倉地帯である。今日では農地の大区画化が始まり、大型機械を導入した大規模稲作による低コスト稲作を目指している。

土下（はした）山（倉吉市向山、北条町側の標高104m）、蜘ヶ家（くもがいやま）山（標高177m）、茶臼山に代表される南部の丘陵地帯では、なだらかな地形を利用して梨、柿などの果樹栽培が盛んに行われている。県下有数の古墳密集地として知られているが、明治以降の桑園地化、近年の果樹園地化によりこれらの古墳は破壊され、当時の様子を忠実に解明するには困難な状況となっている。

現在、海岸沿いの松林に沿って風力発電のための風車を建設する計画がある。ところが海岸沿いの松林は渡り鳥の重要な休憩地になっており、それに対する影響調査が実施されている。また天神川河口も渡り鳥の重要な休憩地や繁殖地であり、良好な観察地として多くのウォッチャーが訪れている。

（田村）





第２図　遺跡位置図

第２節　歴史的環境

中浜遺跡は北条町弓原に所在する。周辺地域は、海岸沿いに発達した北条砂丘、かつてはラグーン（潟湖）であった北条平野、蜘ヶ家山・土下山を中心とした丘陵地という大きく三つの地域に分けることができる。中浜遺跡はこれらのうちの北条砂丘に立地し、過去の採砂の際に遺物が出土したことからその存在が知られていた[註]。付近の遺跡は多くはなく、砂丘地帯の南端部でわずかに下神１号墳（１）が確認されているにとどまる。前方後円墳の可能性があるが、時期等詳細は不明である。

同じ北条砂丘下の遺跡としては、中浜遺跡から約３km東方の長瀬高浜遺跡（56）が著名である。長瀬高浜遺跡は、弥生時代前期から鎌倉・室町時代まで継続した遺跡である。なかでも古墳時代の遺構・遺物がもっとも多い。古墳時代前期には大規模な集落が営まれていたが、古墳時代中期になると住居の数が減少し、古墳の数が増加する。また、９～10世紀以降に営まれた畠跡の遺構も確認されている。この畠跡は13～15世紀頃に砂丘の風害によって廃絶したと考えられ、これ以降北条砂丘における耕作活動が停止したと考えられている。このように、北条砂丘下の遺跡としては、現在は中浜遺跡・長瀬高浜遺跡など数遺跡が知られているのみである。しかし北条砂丘は試掘を含めて調査があまり進んでおらず、今後の遺跡数の増加が予想される。

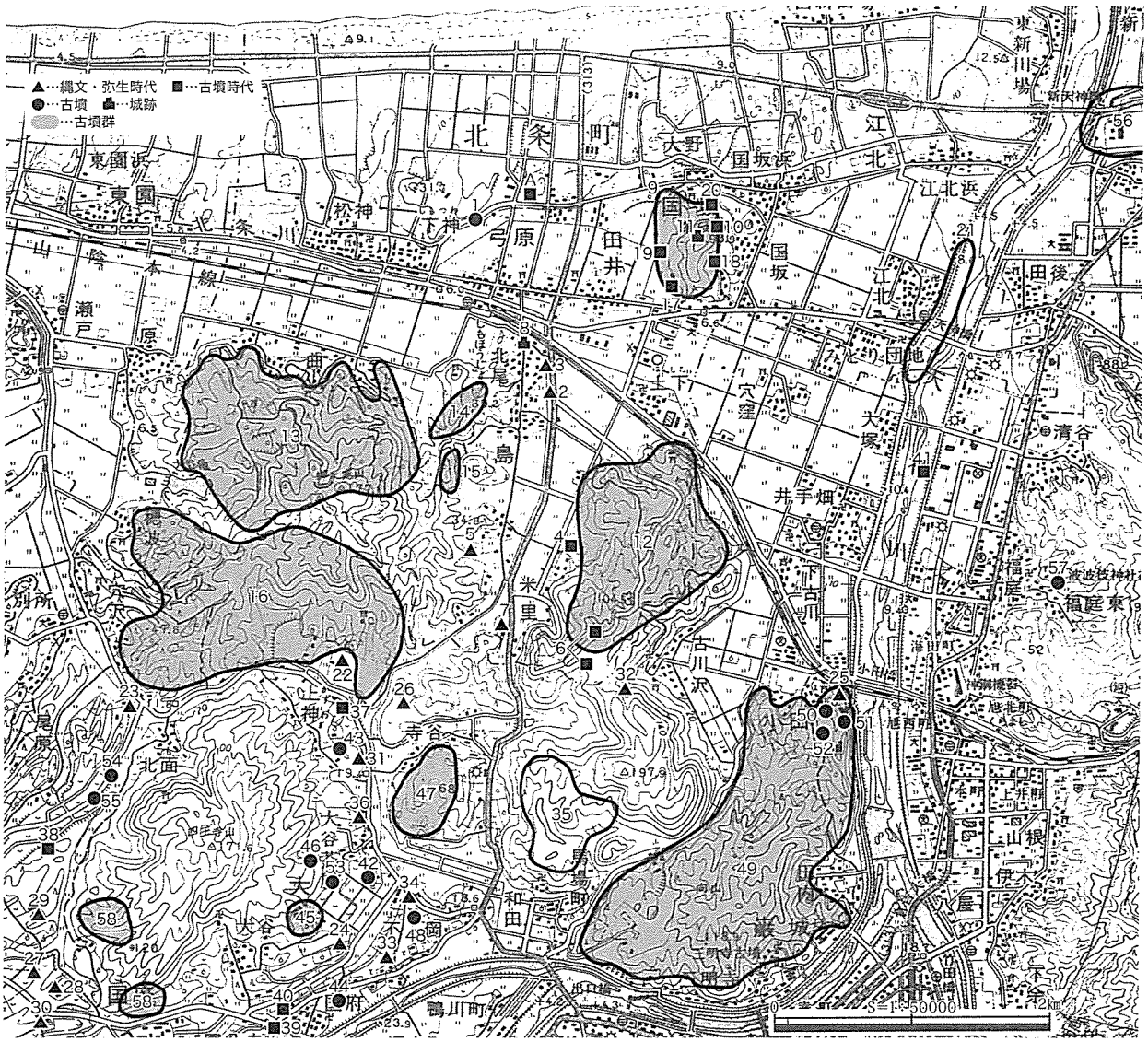
北条平野の南端にあたり、蜘ヶ家山と土下山に挟まれた北尾・島・米里付近では、島遺跡（２、縄文）、北尾遺跡（３）、船渡遺跡（４）（以上縄文～古墳）、米里三ノ嵜遺跡（５、弥生後期～古墳中期）、米里第１・第２遺跡（６、弥生後期～古墳前期）が所在する。島遺跡では丸木船をはじめとする木製品や、山陰では珍しい縄文貝塚が発見されている。また、米里からは袈裟襷文をもつ銅鐸が出土している（７）。島遺跡に隣接する島（字城の内）には、山田氏が承平元（931）年より居城としていた堤城（『陰徳太平記』・『伯耆民談記』）に比定される堤屋敷遺跡（８）がある。山田氏は羽衣石城（東郷町）の南条氏に従属していたが、織田氏が因幡方面に勢力を伸張すると、南条氏から離れて毛利方に付き、吉川元春麾下として鳥取城救援や羽衣石城侵攻に参加している。

北条平野の中に独立した茶臼山周辺には、古墳や奈良時代の遺跡、中世の城郭が所在する。山頂から山麓にかけて茶臼山古墳群（９、中～後期、54基、前方後円墳・円墳）がある。茶臼山東側の山麓、標高20m前後には８～９世紀の大規模な建物跡が発掘された殿屋敷遺跡（10）があり、伯耆国久米郡下神郷の郷倉に比定されている。中世の茶臼山要害跡（11）については、天正九(1581)～十(1582)年、吉川元春の鳥取城救援・羽衣石城侵攻の際に、吉川方が茶臼山に要害を構えたことが文献に記されている(『亀井文書』・『伯耆民談記』)。

北条平野南方の丘陵地帯には多くの古墳が築造されている。主な古墳群には土下古墳群（12、中～後期、297基、前方後円墳・円墳)、曲古墳群（13、中～後期、264基、前方後円墳・円墳)、北尾古墳群（14、前～中期、27基、円墳・方墳)、島古墳群（15、中～後期、13基、円墳）がある。これら丘陵上の古墳群の分布は北条町内にとどまらず、さらに南の倉吉市域に続いている。前期の古墳では上神大将塚古墳（43)、大谷大将塚古墳（46)、向山古墳群宮ノ峯支群（51）がある。なお、伯耆東部における前期の首長墳としては国分寺古墳（44)、橋津（馬ノ山）４号墳（羽合町）が知られている。中期～後期の主な古墳群は上神古墳群（16)、向山古墳群（49)、屋喜山古墳群（47）が分布している。

(鈴木)

註)『日本の古代遺跡９　鳥取』(野田久男・清水真一、1983年、保育社）に記載のある「北条町弓原浜遺跡」は、中浜遺跡を指すものと思われる。



	遺　跡　名	時　　期	備　　考		遺　跡　名	時　　期	備　　考
A	中浜遺跡	弥生～平安		29	両長谷遺跡	弥生後期･古墳終末期	弥生後期 集落、古墳終末期 横穴式石室
1	下神１号墳	古墳	前方後円墳？	30	中峰遺跡	弥生後期	土壙墓
2	島遺跡	縄文	貝塚　丸木船他	31	柴栗古墳群	弥生後期～古墳前期	墳丘墓 方墳 円墳
3	北尾遺跡	縄文～古墳	散布地	32	下張坪遺跡	弥生後期･古墳中期	弥生後期 集落、古墳中期 古墳群67基
4	船渡遺跡	縄文～古墳	縄文　散布地、古墳 木製品	33	不入岡遺跡	弥生後期･平安	弥生後期 集落、平安 大型建物
5	米里三ノ嵜遺跡	弥生後期～古墳中期	集落	34	沢ベリ遺跡(1次)	弥生後期～古墳前期	集落
6	米里第1・第2遺跡	弥生後期～古墳前期	散布地	35	夏谷遺跡	弥生後期～古墳前期	弥生後期～古墳前期　集落
7	米里銅鐸出土地	弥生中期～弥生後期	袈裟襷文			古墳後期	方墳　円墳
8	堤屋敷遺跡	室町	山田氏居館	36	三度舞墳丘墓	弥生後期～古墳前期	墳丘墓
9	茶臼山古墳群	古墳中期～古墳後期	54基 前方後円墳 円墳	37	上神猫山遺跡	古墳前期～古墳中期	集落 古墳群 方墳 円墳
10	殿屋敷遺跡	古墳前期～古墳中期	古墳前期～古墳中期　集落	38	道祖神峰遺跡	古墳前期	集落
		奈良時代	奈良　下神郷郷倉？	39	宮ノ下遺跡	古墳前期～古墳後期	集落
11	茶臼山要害跡	室町～安土・桃山	吉川氏要害	40	擲塚遺跡	古墳	集落
12	土下古墳群	古墳中期～古墳後期	297基 前方後円墳 円墳	41	徳田沖遺跡	古墳	散布地
13	曲古墳群	古墳中期～古墳後期	264基 前方後円墳 円墳	42	イザ原古墳群	古墳前期～古墳中期	割竹形木棺あり
14	北尾古墳群	古墳前期～古墳中期	27基 方墳 円墳	43	上神大将塚古墳	古墳前期	仿製三角縁神獣鏡 琴柱形石製品他
15	島古墳群	古墳中期～古墳後期	13基 円墳	44	国分寺古墳	古墳前期	前方後円墳？三角縁五神四獣鏡
16	上神古墳群	古墳中期～古墳後期	約200基 円墳	45	大谷古墳群	古墳	不明
17	用露鼻遺跡	古墳後期	散布地	46	大谷大将塚古墳	古墳前期	前方後円墳 竪穴式石室
18	馬場遺跡	古墳後期	散布地	47	屋喜山古墳群	古墳前期～古墳中期	83基 円墳
19	長畑遺跡	古墳後期	散布地	48	沢ベリ遺跡(２次)	古墳中期～古墳後期	帆立貝式 方墳 前方後円墳 円墳
20	宇ノ塚遺跡	古墳後期	散布地	49	向山古墳群	古墳中期～古墳後期	約300基
21	天神川河床遺跡	古墳	散布地	50	向山樋口支群	古墳中期～古墳後期	円墳
22	トドロケ遺跡	弥生	玉造	51	向山宮ノ峰支群	古墳前期～古墳後期	前方後円墳 方墳 円墳
23	イキス遺跡	弥生前期	土壙墓	52	向山堤谷支群	古墳中期～古墳後期	円墳
24	中尾遺跡	弥生前期～弥生後期	弥生前期～弥生後期 集落	53	小林古墳群	古墳後期	円墳
		古墳後期	古墳後期横穴式石室	54	取木遺跡	古墳終末期	方墳 横穴式石室
25	小田銅鐸出土地	弥生中期～弥生後期	袈裟襷文	55	一反半田遺跡	古墳終末期	横穴式石室
26	西前遺跡	弥生中期～古墳	弥生中期～古墳　集落	56	長瀬高浜遺跡	弥生前期～中世	集落 古墳
		古墳後期	古墳 横穴式石室	57	福庭古墳	古墳終末期	横穴式石室　装飾古墳
27	遠藤谷峯遺跡	弥生後期	集落	58	その他の古墳群		
28	白市遺跡	弥生後期	集落				

第３図　周辺遺跡分布図

第３章　発掘調査の成果

第１節　遺跡の立地と層序

中浜遺跡は、JR山陰本線下北条駅の北方約１㎞に位置し、北条町弓原地内の独立丘陵上に立地する。調査前の標高は約11～20mで、周囲の畑地との比高は２～10m前後である。北に日本海を望み、海岸線からは約1.2㎞南へ離れている。調査地の東方約3.5㎞には一級河川である天神川が北流し、また調査地の南方約１㎞には北条川が西流している。調査前の地目は、Ａ区は山林、Ｂ区は墓地であった。Ａ、Ｂ両区は、過去に行われた砂利採取によって幅約40mにわたって分断されている。また、Ａ区東南側のＦ３杭付近からＫ５杭付近にかけても、同じく砂利採取による大規模な撹乱を被っている。

調査地一帯は「北条砂丘」と呼ばれる海岸砂丘地にあたり、調査地の立地する丘陵も周囲の畑地と同様に厚い白色砂層（第４図の「Ums層」）によって覆われていた。白色砂層の厚さは最大で約４ｍに達する。北条町教育委員会による試掘調査及びボーリング調査の成果[註1)]によれば、この砂層は殆ど遺物を包含せず、また羽合町長瀬高浜遺跡で遺構面を形成していた「クロスナ層」も本調査地内では確認されなかった[註2)]。そのため白色砂層は表土として扱い、調査に先立ち重機によって除去した。

白色砂層除去後の地形は、Ａ区東南隅を最高所（標高約16m）とし、南北方向へそれぞれ傾斜している。Ａ区北端で最も低くなり、標高約９ｍである。また、Ａ区においては北西方向へむかっても標高が減じており、Ｈ７杭付近を底とする淵状の地形を呈している。

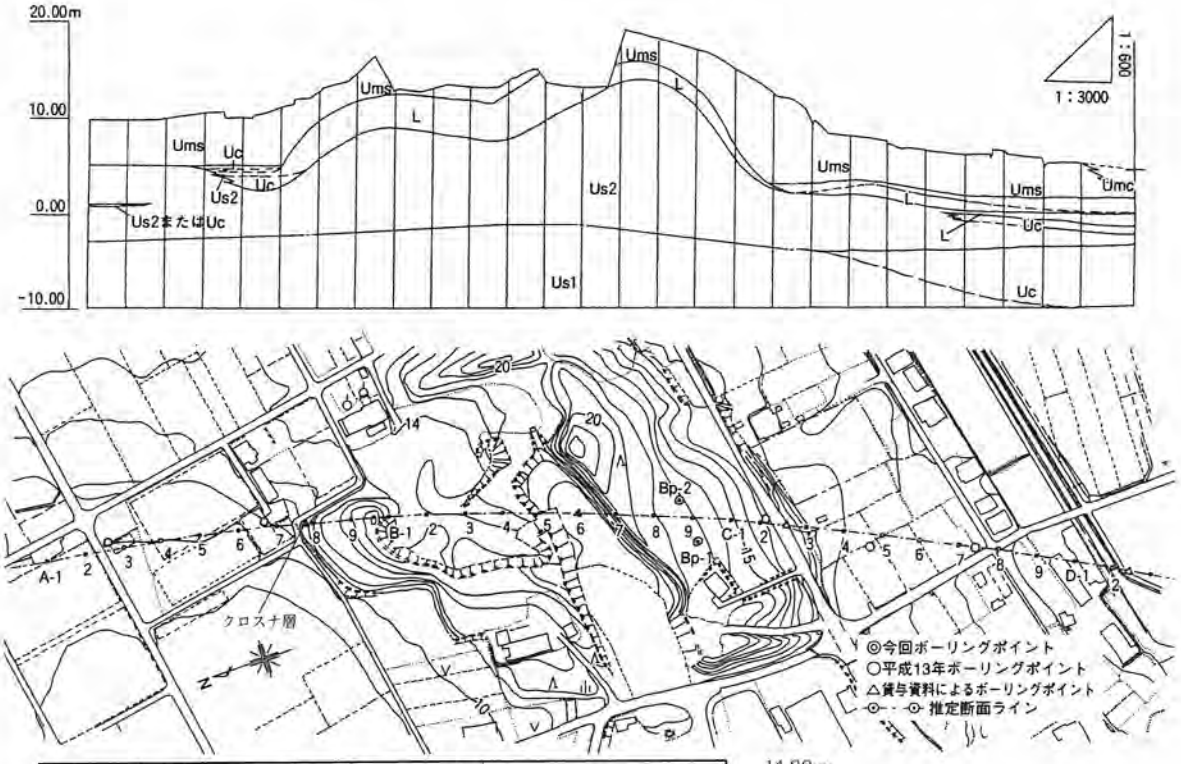
Ｂ区は、北端から南へ向けて緩やかに傾斜しているが、Ｒグリッドラインから６～７ｍ南、標高約13m付近で急崖となって落ち込んでいる。この崖線より南側では、標高約10m付近まで掘り下げてもなお白色砂層の堆積が続いており、遺構面の確認に至らなかったため、調査の対象から除外した。

白色砂層の直下は、基本的にホーキ層ないし姶良火山灰層（AT層）などの火山灰質土層（第４図の「Ｌ層」）となるが、Ａ区の標高14.5m～10.25m（Ｃ３杭付近）の範囲、及び先述したＢ区南端の崖の法面には、白色砂層とＬ層との間に、10～50㎝の厚さで黒灰色土が堆積していた（第５図）。また、黒灰色土はＢ区の遺構の埋土となっており、かつては調査地全体に堆積していた可能性が高い。

この黒灰色土の上面では、Ａ区で畝状遺構を確認したためこれを第１遺構面とし、Ｌ層上面を第２遺構面とした。なお、Ｂ区南端に堆積した黒灰色土は急傾斜のため調査を行えなかったので、第１遺構面が存在するのはＡ区のみということになる。またＡ区北端では、黒灰色土と第２遺構面との間に暗褐色土（無遺物層）が厚さ約30㎝で堆積していた。

黒灰色土は粘性の極めて強いシルト質で、ラミナ状に砂が混入している。また、弥生土器、土師器、土師質土器、石器などの遺物を包含している。堆積時期については、黒灰色土を埋土とするＢ区の土坑SK２から遺存度の高い伯耆国庁編年２段階（９世紀後半）の土師質土器が出土したこと、さらにこれが黒灰色土出土遺物中最新相を示すことから、平安時代前期ないしそれに近い時期と考えられる。このことは、Ａ区で検出した古墳時代前期後半の竪穴建物跡SI１の埋土が黒灰色土によって覆われていたこと、包含層中の弥生土器・土師器は殆どが細片であり、かつ著しく摩滅していることと矛盾しない。したがって、法面に黒灰色土が堆積していたＢ区南端の崖状地形は、後世の破壊によるものではなく、平安時代以前に既に形成されていた地形であろう。

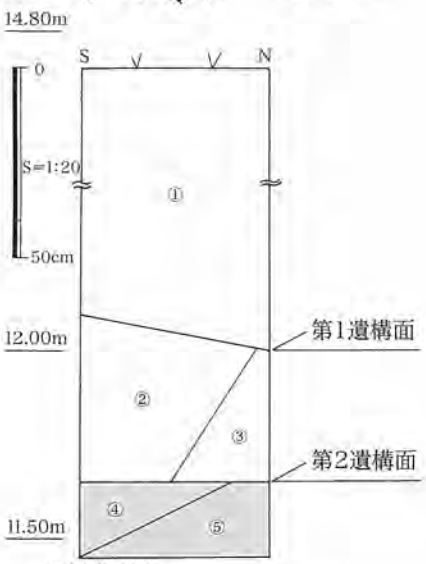
なお、第２遺構面以下のＬ層の層序については、撹乱坑の崖面においてAT層から大山倉吉軽石



地質時代		地層名	記号	層厚(m)[3]	構成土質[4]
第四記	完新世	最上部粘性土層	Umc	2.30程度	砂質粘土
		最上部砂質土層	Ums	0.50～5.00	(シルト・礫混じり)砂
		上部粘性土層	Uc	1.49以下	(砂混じり)粘土、有機質土 他
		火山灰質土層	L	3.90程度以下	(有機物・礫混じり)ローム 他
		部砂質土層2	Us2	0.36以上	(粘土混じり・シルト質)砂 他
		上部砂質土層1	Us1	－	砂

注3）層厚は今回の調査で確認されたもの(未確認の地層については貸与資料から読みとったもの)。
注4）貸与資料の構成土質は、地層推定断面図から読みとったもの。

第４図　調査区周辺地質推定平断面図



第５図　Ａ区層序模式図

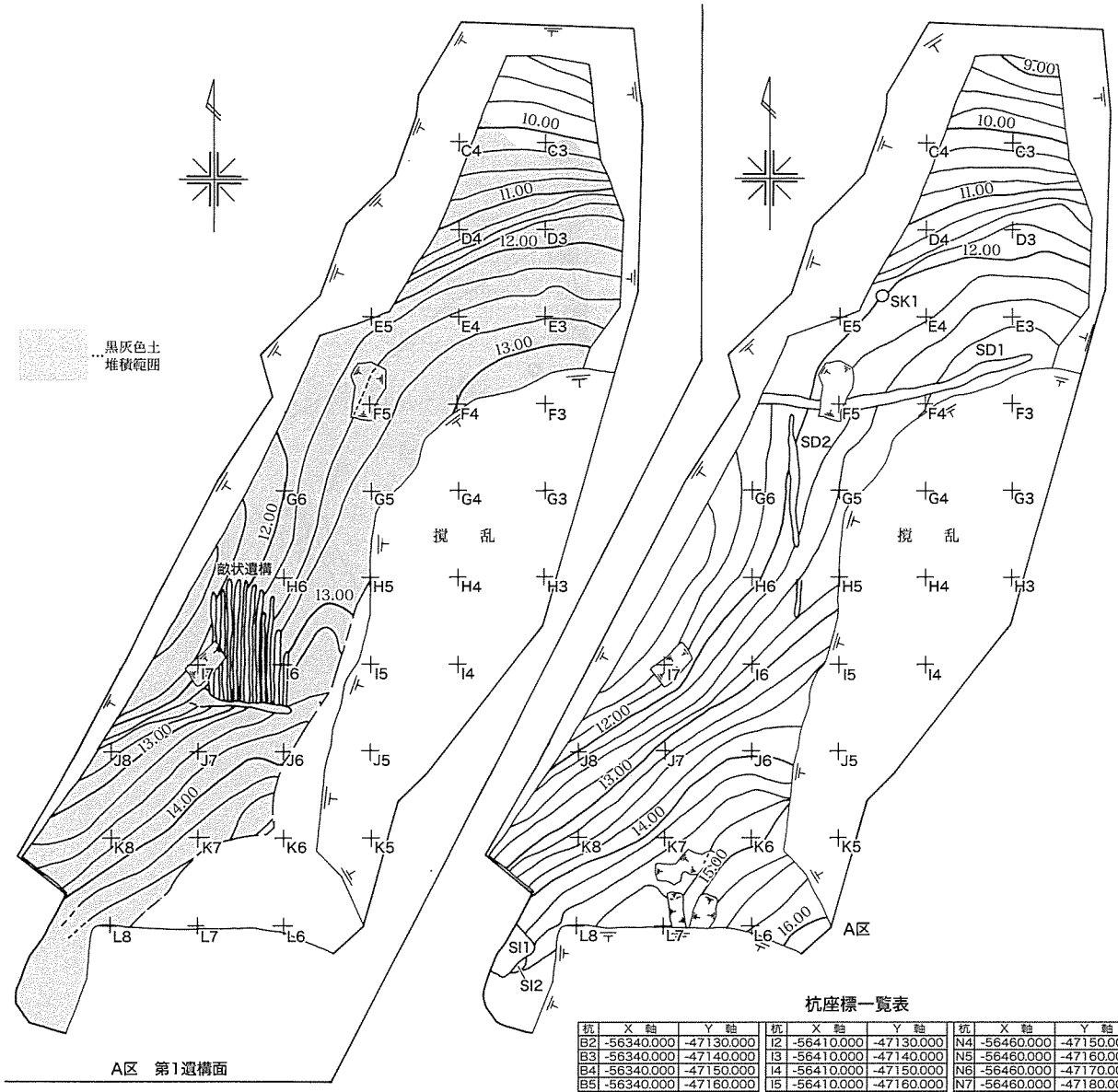
(DKP) 層までの安定した堆積が観察された[注3]。

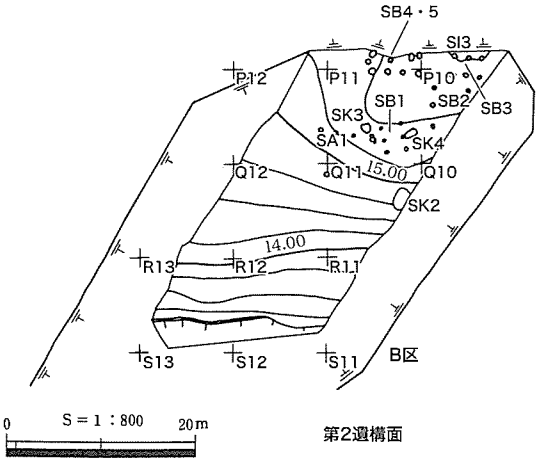
以上をまとめると、本調査地は火山灰質土層を基盤とする丘陵地形に営まれた遺跡であり、平安時代以降、急激に進行した砂丘化現象によって埋没したものと考えられる。(君嶋)

写真３　Ａ区　調査前状況（南から）

註１）福庭克展編　2003　『町内遺跡発掘調査報告書　第12集』北条町埋蔵文化財報告書32、北条町教育委員会
註２）調査地周辺のボーリング調査において、クロスナ層が確認されたのは、調査地最北端の１箇所（第４図中北側の△）のみである。
註３）ただし、(福庭編2003) 所収の地質調査報告では、Ｌ層は「水成などによる二次堆積物」と評価されている。
【第４図の出典】
(福庭編2003) ｐ.16の挿図16（一部改変）、ｐ.14の表３

第６図　調査前地形測量図

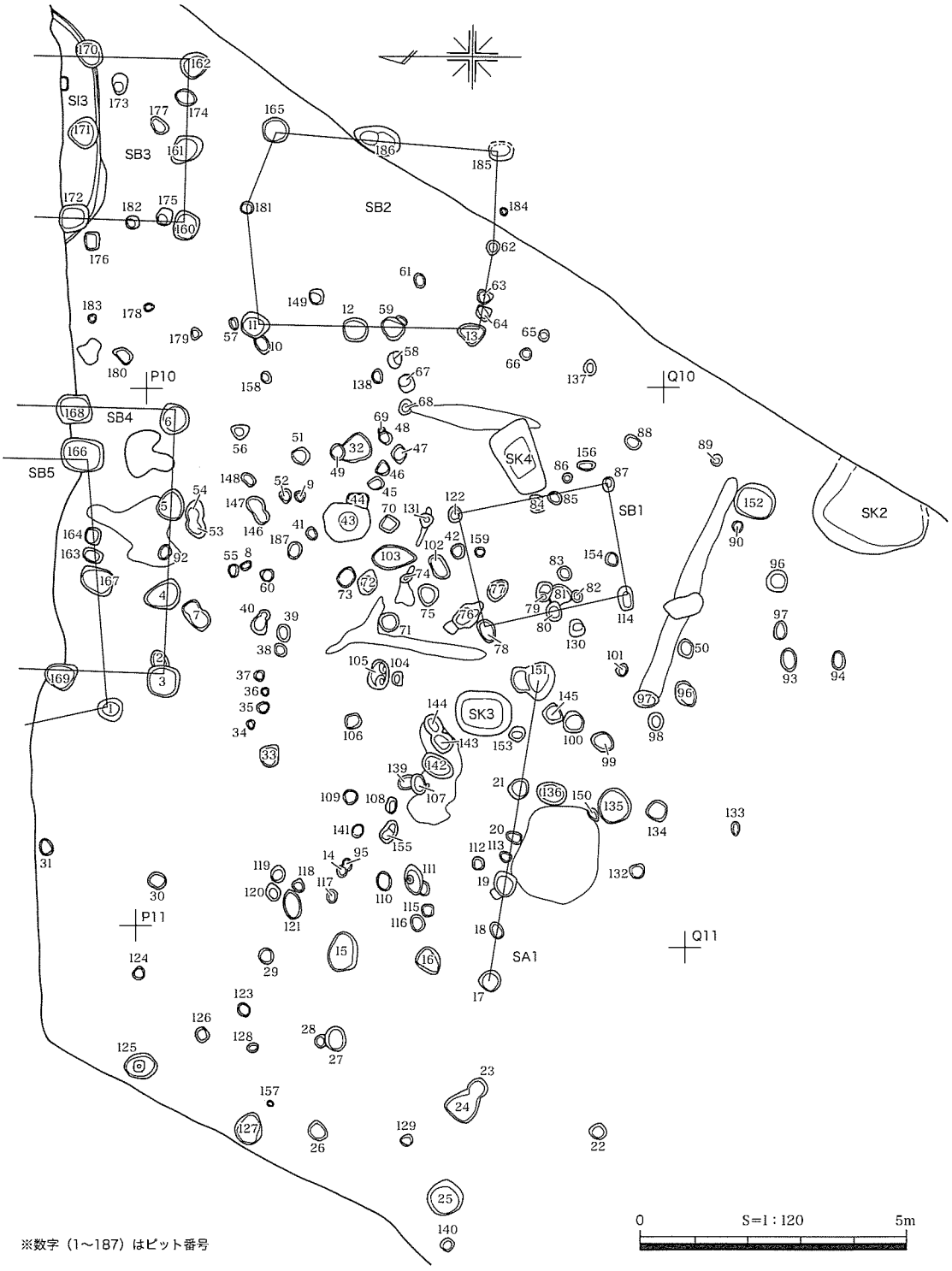




杭座標一覧表

杭	X 軸	Y 軸	杭	X 軸	Y 軸	杭	X 軸	Y 軸
B2	-56340.000	-47130.000	I2	-56410.000	-47130.000	N4	-56460.000	-47150.000
B3	-56340.000	-47140.000	I3	-56410.000	-47140.000	N5	-56460.000	-47160.000
B4	-56340.000	-47150.000	I4	-56410.000	-47150.000	N6	-56460.000	-47170.000
B5	-56340.000	-47160.000	I5	-56410.000	-47160.000	N7	-56460.000	-47180.000
B6	-56340.000	-47170.000	I6	-56410.000	-47170.000	N8	-56460.000	-47190.000
C2	-56350.000	-47130.000	I7	-56410.000	-47180.000	N9	-56460.000	-47200.000
C3	-56350.000	-47140.000	I8	-56410.000	-47190.000	N10	-56460.000	-47210.000
C4	-56350.000	-47150.000	J3	-56420.000	-47140.000	N11	-56460.000	-47220.000
C5	-56350.000	-47160.000	J4	-56420.000	-47150.000	N12	-56460.000	-47230.000
C6	-56350.000	-47170.000	J5	-56420.000	-47160.000	O4	-56470.000	-47150.000
C7	-56350.000	-47180.000	J6	-56420.000	-47170.000	O5	-56470.000	-47160.000
D2	-56360.000	-47130.000	J7	-56420.000	-47180.000	O6	-56470.000	-47170.000
D3	-56360.000	-47140.000	J8	-56420.000	-47190.000	O7	-56470.000	-47180.000
D4	-56360.000	-47150.000	J9	-56420.000	-47200.000	O8	-56470.000	-47190.000
D5	-56360.000	-47160.000	K4	-56430.000	-47150.000	O9	-56470.000	-47200.000
D6	-56360.000	-47170.000	K5	-56430.000	-47160.000	O10	-56470.000	-47210.000
D7	-56360.000	-47180.000	K6	-56430.000	-47170.000	O11	-56470.000	-47220.000
E2	-56370.000	-47130.000	K7	-56430.000	-47180.000	O12	-56470.000	-47230.000
E3	-56370.000	-47140.000	K8	-56430.000	-47190.000	P6	-56480.000	-47170.000
E4	-56370.000	-47150.000	K9	-56430.000	-47200.000	P7	-56480.000	-47180.000
E5	-56370.000	-47160.000	K10	-56430.000	-47210.000	P8	-56480.000	-47190.000
E6	-56370.000	-47170.000	K11	-56430.000	-47220.000	P9	-56480.000	-47200.000
E7	-56370.000	-47180.000	L4	-56440.000	-47150.000	P10	-56480.000	-47210.000
E8	-56370.000	-47190.000	L5	-56440.000	-47160.000	P11	-56480.000	-47220.000
F2	-56380.000	-47130.000	L6	-56440.000	-47170.000	P12	-56480.000	-47230.000
F3	-56380.000	-47140.000	L7	-56440.000	-47180.000	P13	-56480.000	-47240.000
F4	-56380.000	-47150.000	L8	-56440.000	-47190.000	Q8	-56490.000	-47190.000
F5	-56380.000	-47160.000	L9	-56440.000	-47200.000	Q9	-56490.000	-47200.000
F6	-56380.000	-47170.000	L10	-56440.000	-47210.000	Q10	-56490.000	-47210.000
F7	-56380.000	-47180.000	L11	-56440.000	-47220.000	Q11	-56490.000	-47220.000
F8	-56380.000	-47190.000	L12	-56440.000	-47230.000	Q12	-56490.000	-47230.000
G2	-56390.000	-47130.000	M5	-56450.000	-47160.000	Q13	-56490.000	-47240.000
G3	-56390.000	-47140.000	M6	-56450.000	-47170.000	R9	-56500.000	-47200.000
G4	-56390.000	-47150.000	M7	-56450.000	-47180.000	R10	-56500.000	-47210.000
G5	-56390.000	-47160.000	M8	-56450.000	-47190.000	R11	-56500.000	-47220.000
G6	-56390.000	-47170.000	M9	-56450.000	-47200.000	R12	-56500.000	-47230.000
G7	-56390.000	-47180.000	M10	-56450.000	-47210.000	R13	-56500.000	-47240.000
G8	-56390.000	-47190.000	M11	-56450.000	-47220.000	R14	-56500.000	-47250.000
H2	-56400.000	-47130.000	M12	-56450.000	-47230.000	S10	-56510.000	-47210.000
H3	-56400.000	-47140.000				S11	-56510.000	-47220.000
H4	-56400.000	-47150.000				S12	-56510.000	-47230.000
H5	-56400.000	-47160.000				S13	-56510.000	-47240.000
H6	-56400.000	-47170.000				S14	-56510.000	-47250.000
H7	-56400.000	-47180.000						
H8	-56400.000	-47190.000						

第７図　調査区全体図



第８図　Ｂ区遺構全体図

第２節　第１遺構面の調査

（１）畝状遺構（第９図、PL.３）

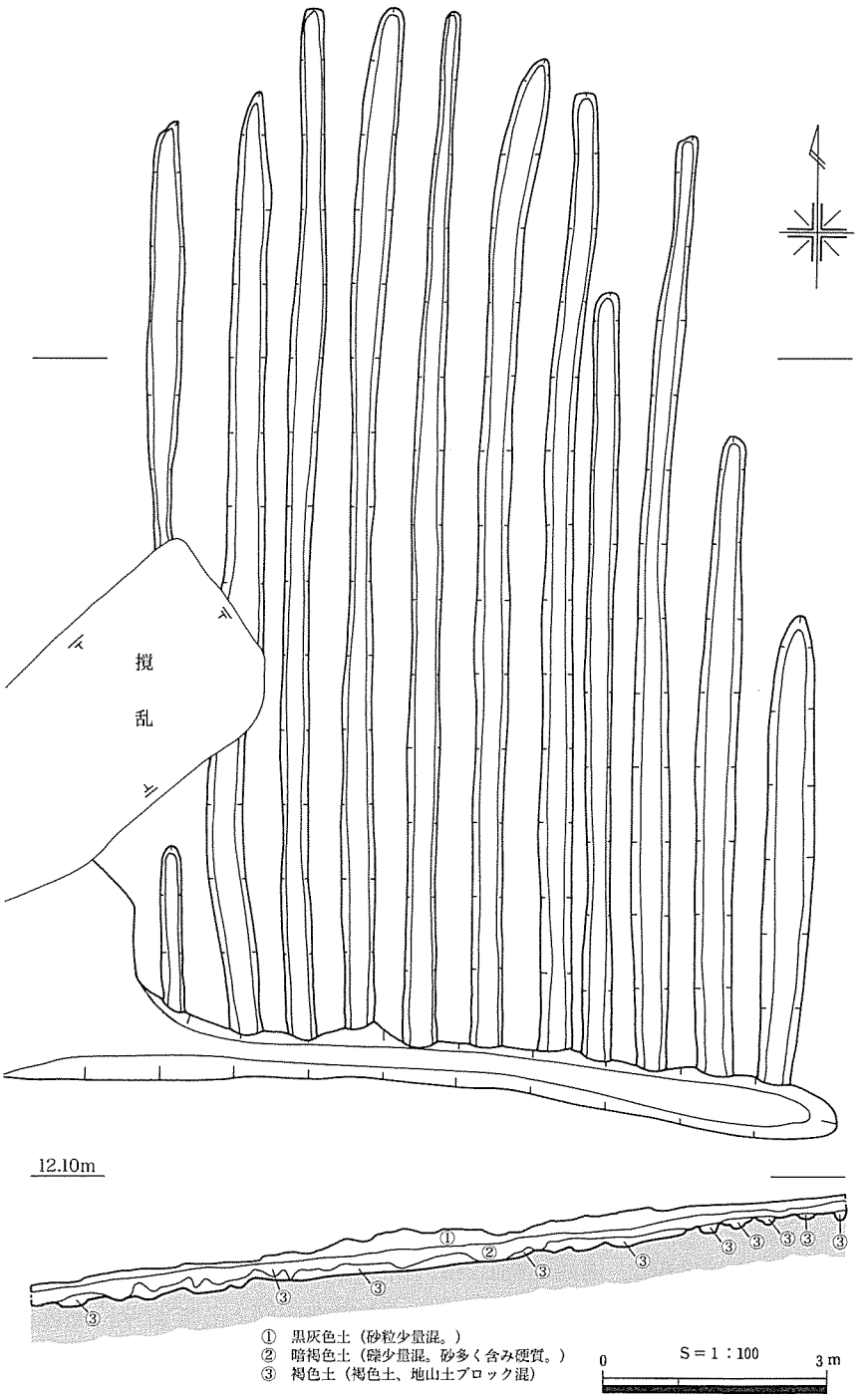
A区H6・I6グリッド、標高11.5mから12.7mの緩斜面に位置する。畠の畝跡、あるいは耕作溝と思われるが、溝部分のみ現存し、畝は良好な状態で検出されていない。白色砂層除去後の黒褐色土上面で検出され、溝状を呈する畝間も白色砂により埋没していた。

検出した範囲は南北16m、東西9.5m、面積約98㎡である。ほぼ正南北方向にのびる11本の畝間が、1本の東西方向の溝に連結している。畝間はほぼ直線的であるが、北端部でわずかに東にふれる。畝間の長

さは、長いもので14.0m、短いもので6.2m、深さは最大0.2mである。

出土遺物はなく時期は不明であるが、土層断面をみると複数の溝が上下に重複しており、同じ場所で耕作が続けられた様子が窺える。その廃絶理由については、羽合町長瀬高浜遺跡の畠跡について想定されている[註)]のと同様に、砂丘地の風害による埋没であった可能が高い。　（鈴木）

註）八峠　興編　1997『長瀬高浜遺跡Ⅶ』鳥取県教育文化財団



第９図　畝状遺構

第３節　第２遺構面の調査

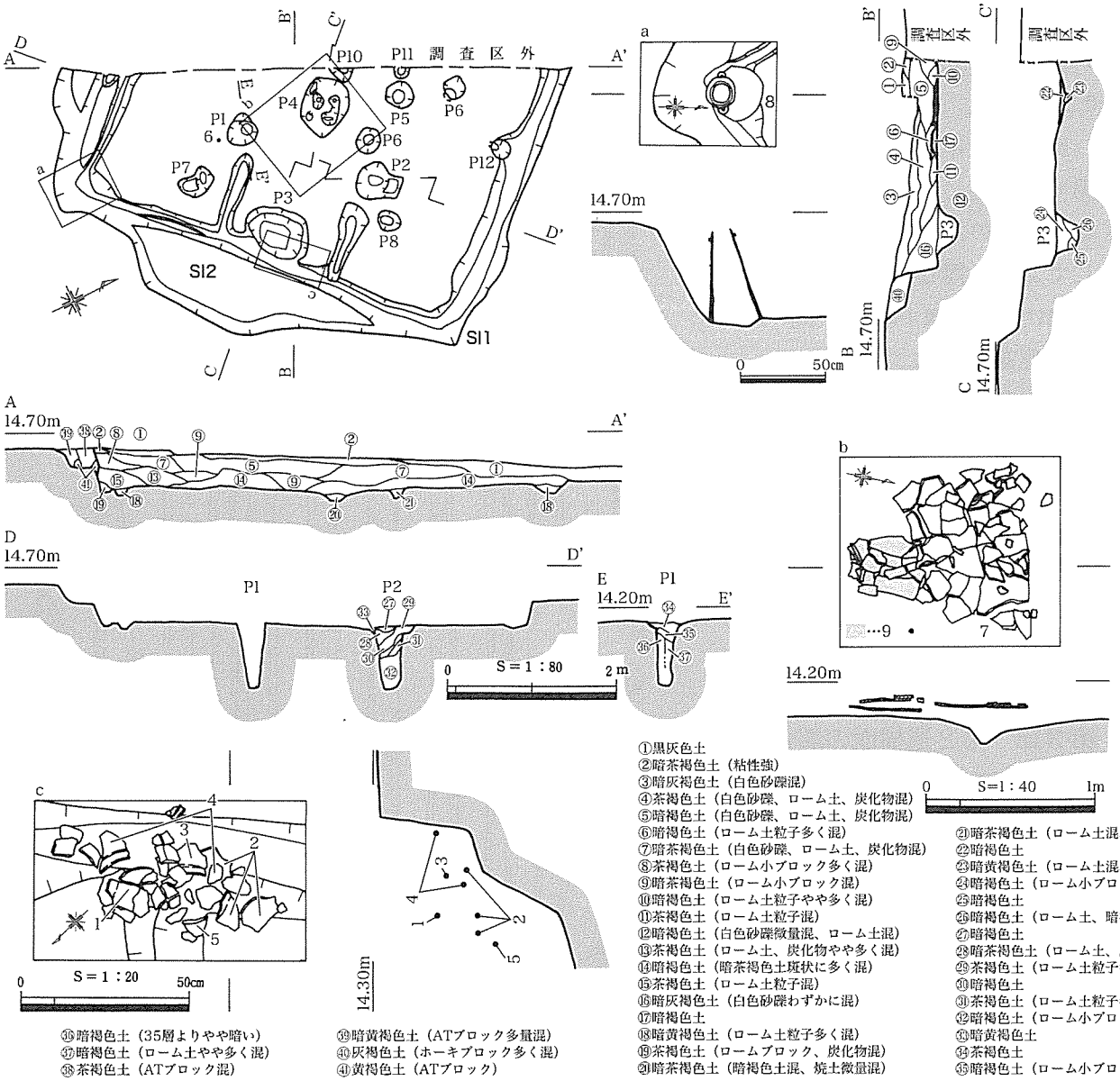
（１）概要

第２遺構面は、黒灰色土直下（Ｂ区では白色砂層直下）の火山灰質土上面で確認した遺構面である。調査の結果、竪穴建物跡３基、掘立柱建物跡５棟、柵列１条、溝２条、土坑４基、ピット（柱穴）408基を検出した。時期の判明した遺構はＳＩ１（古墳時代前期後半）及びSK２・SA１（平安時代前期）である。また、SI３、掘立柱建物跡、ピット群は埋土の類似からSK２・SA１と同時期の可能性が高い。埋土に白色砂を含むSK３・SK４はこれらに後出する遺構と考えられる。　（君嶋）

（２）竪穴建物跡

SI１・２（第10・11図、PL.１・３・４・８～11）

Ａ区L8グリッド、標高14.1～14.6mの緩斜面に位置する。本遺構は、検出段階では主軸を違える２基の竪穴建物跡が重複しているものと考え、それぞれSI１、SI２と呼称した。調査の結果、土層断面の観察よりSI１がSI２に後出することが明らかとなったが、SI２の底面では壁溝や柱穴は確認できず、竪穴建物跡である確証は得られなかった。



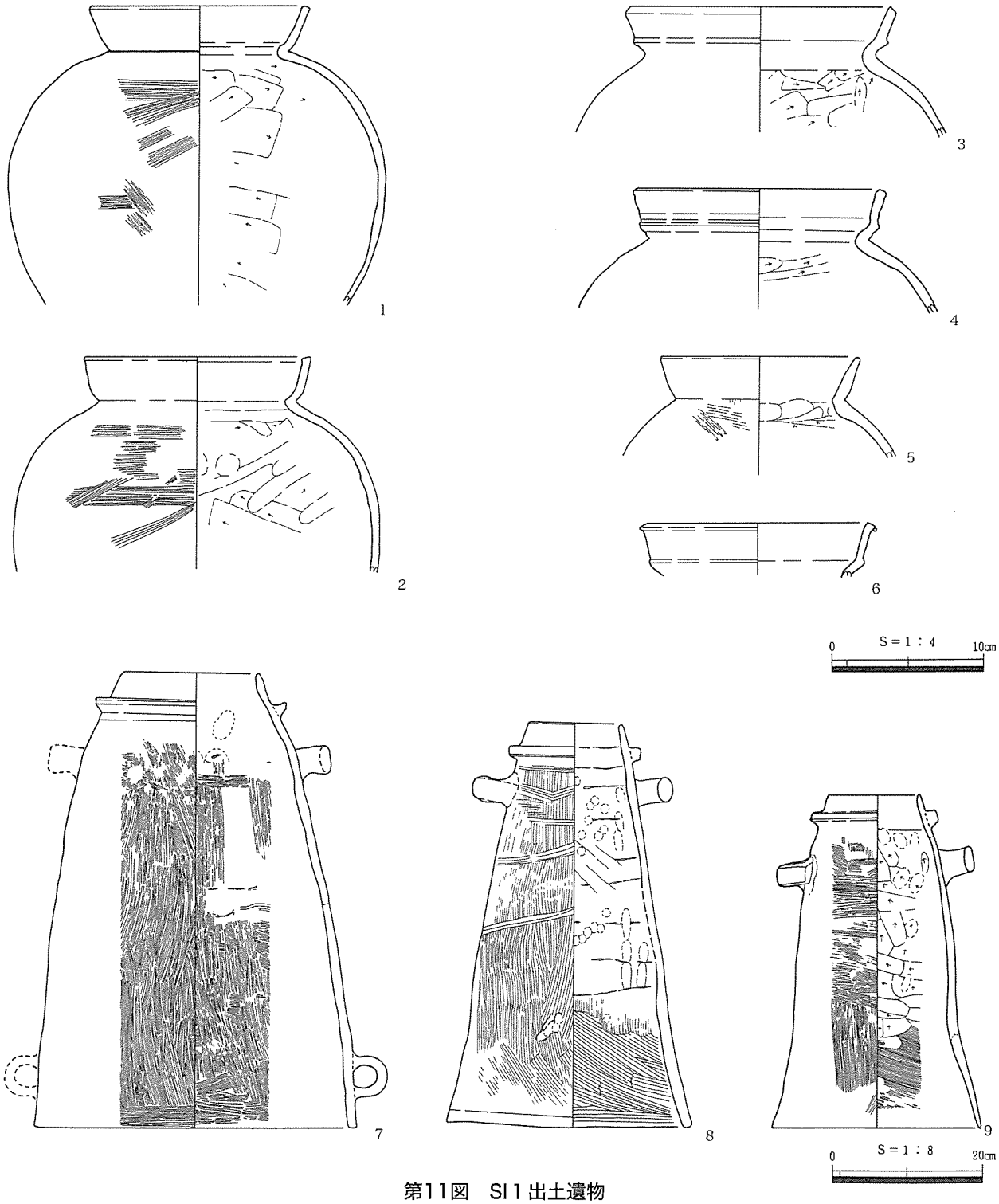
第10図　SI１・２

SI１は、北西側が調査区外にかかっているため全体の形状及び規模は不明である。検出した範囲では北東辺約3.6m、南西辺約1.2m、南東辺約5.2mの方形を呈する。検出面からの深さは、最大で約60cmである。地山であるAT層、ローム土層を床面としており、貼床は施されていない。床面の周囲には壁溝を伴い、検出した範囲内では全周する。

ピットは12基検出した。規模及び位置から主柱穴と考えられるのはＰ１、Ｐ２である。南東壁際のＰ３は方形を呈し、両側に区画溝を伴う。２条の区画溝は長さ約90cm、幅約20～30cm、深さ約10cmで、壁に直交して直線的にのびている。Ｐ４は不整円形で、底面は凹凸が著しい。底面には被熱して赤化した部分があり、地床炉として使われた可能性があるが、埋土への焼土や炭化物の混入は顕著ではない。

SI１の埋土は、おおむねレンズ状の堆積を示しており、自然に埋没したものと考えられる。また、埋没後に黒灰色土（①層）によってパックされている。

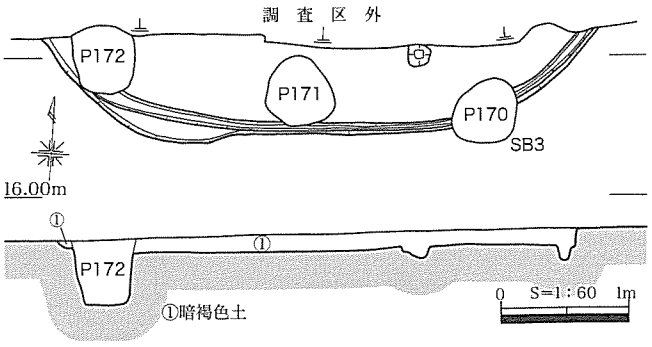
SI１からは、いわゆる「山陰型甑形土器」３個体の他、土器片数十点が出土した。甑形土器８は、南側隅角部の床面上に直立した状態で出土した。同７・９は、Ｐ４付近から破片となって出土したが、ともに完形に復元できた。７・９とも床面には密着しておらず、９は５cmほど浮いた状態で出土した。また７は、一個体分の破片が全て内面を上側に向けており、Ｐ４の埋没後に人為的に敷き並べられた



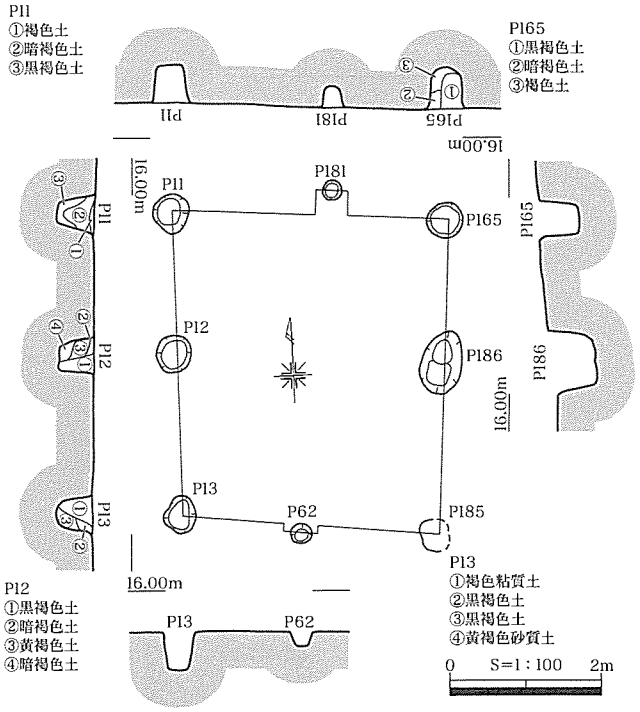
第11図　SI１出土遺物

ことが明らかである。さらに、７の狭口側の破片の一部が９の広口側の破片の上に重なっていたことから、９の遺棄後にさほどの時間を経ずして７の破片が並べられたものと考えられる。このことから、９も意図的に破砕された可能性が高い。なお、これら３個体の甑形土器には、被熱や煤の付着など使用の痕跡はまったく認められない。Ｐ３付近の埋土中からは、甕形土器１～５が出土した。これらは別の場所で破損したものがＰ３埋没後に投棄されたものと考えられる。甕形土器６は小破片であり、床面に密着して出土した。これら甕形土器は天神川Ⅳ～Ⅴ期の特徴を備えており、SI１は古墳時代前期後半に埋没した遺構と想定される。

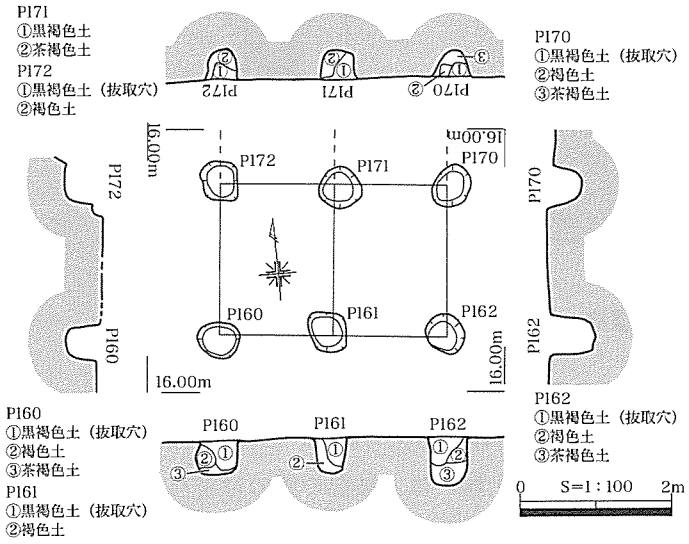
（君嶋）



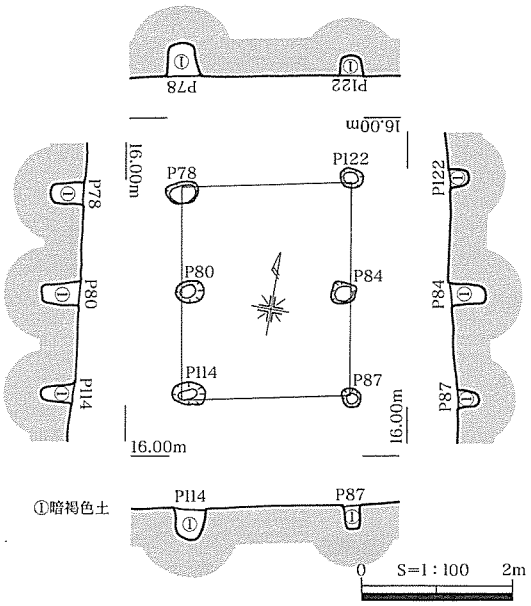
第12図　SI3



第14図　SB2



第15図　SB3



第13図　SB1

SI３（第12図、PL.３）

Ｂ区北端のO9グリッド、標高15.6m～15.7mに位置する。本来は円形であったと思われるが、北側の大半を破壊されている。検出した範囲では長辺4.5m、短辺0.8m、検出面から床面までの深さ15cmである。床面の周囲には壁溝を伴う。柱穴は１基検出した。長径22cm、短径16cm、深さ８cmである。埋土は暗褐色土の単層である。遺物が出土せず、時期は不明である。SB３の柱穴３基と重複するが、土層断面の検討からSI３がSB３に先行することは明らかである。

（鈴木）

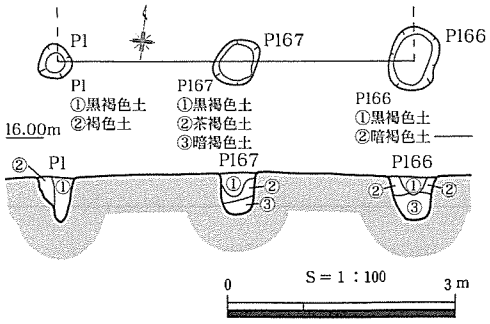
（３）掘立柱建物跡・柵列

SB１（第13図）

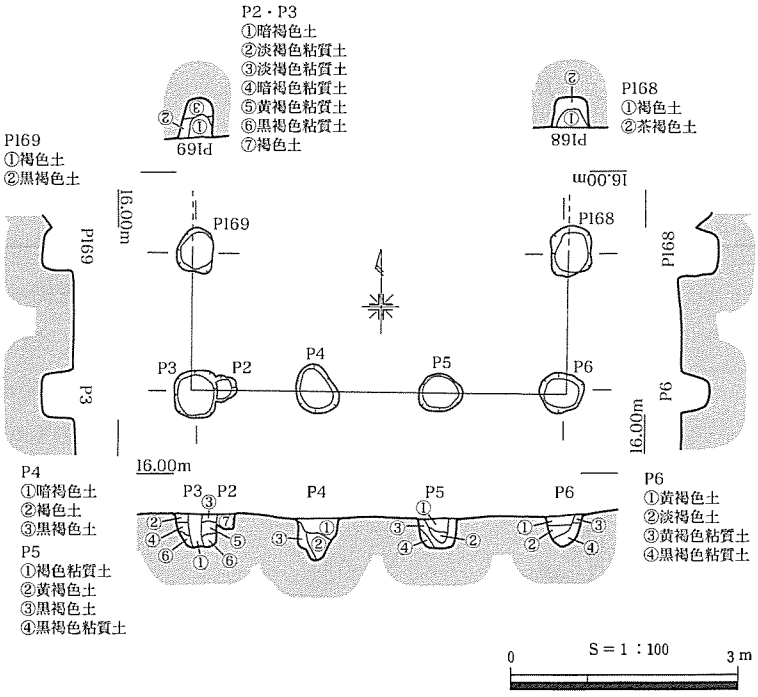
B区P10グリッド、標高15.3m～15.5m付近に位置する。６基の小柱穴により構成される南北棟の建物跡である。柱穴の径は0.3m～0.5mで、他の建物跡に比べて小型である。柱間はやや不揃いである。方位も、他の４棟が東西南北をほぼ一致させるのに対して北で西方向にやや大きく（N-12°-W）ふれ、他の建物跡と方位を違えている。出土遺物がなく時期は不明だが、柱間が不揃いであることや方位の違いから、他の建物跡と時期が異なる可能性がある。　（鈴木）

SB２（第14図、PL.５）

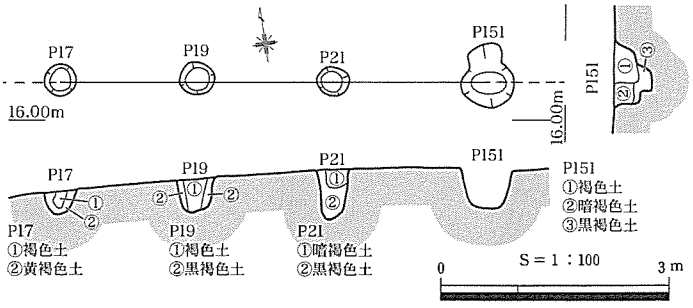
B区P9グリッド、標高15.3m～15.6mに位置



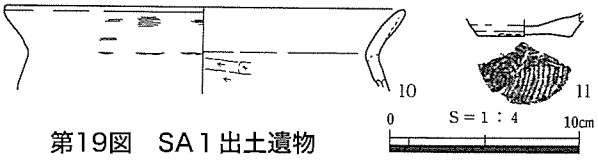
第16図　SB５



第17図　SB４



第18図　SA１



第19図　SA１出土遺物

する。６基の主柱穴と２基の棟持柱で構成される南北棟である。主柱穴は径0.4mから0.7mで、柱の抜き取り穴が付属する。柱間は桁行2.0m、梁行1.8mで正確に配列されている。棟持柱穴は径が0.2m前後と小型である。南側棟持柱は中央に位置するが、北側棟持柱は中央から0.2mほど東に寄った位置で検出されている。方位は北でわずかに東に（N-４°-E）ふれる。出土遺物はなく時期は不明である。　（鈴木）

SB３（第15図、PL.５）

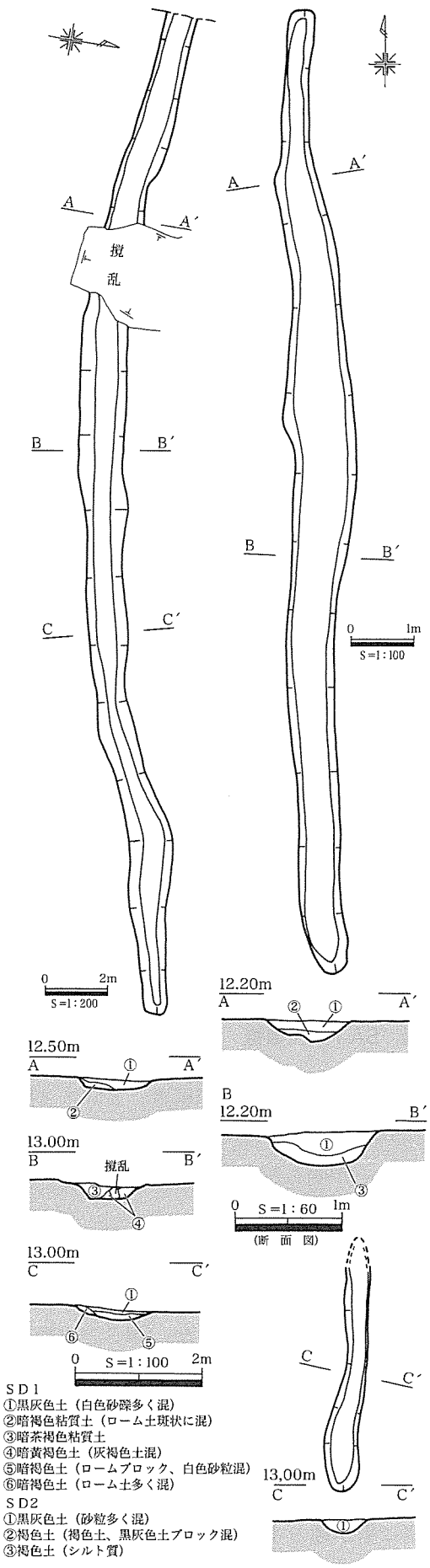
B区O9グリッド、標高15.6m～15.7mに位置する。６基以上の柱穴で構成される。柱間は南北方向に2.0m、東西方向に1.5mである。柱穴の径は0.5mから0.7mと比較的大きく、検出した６基の柱穴だけで東西棟の建物を想定した場合には梁行が2.0mと狭く、柱穴も大きすぎる。したがって、本来は調査区北側にさらに柱穴が続き、２間×２間以上の南北棟の総柱建物であった可能性が高い。方位は北でわずかに東に（N-４°-E）ふれる。出土遺物はなく時期は不明だが、切り合い関係からSI３に後出することが明らかである。　（鈴木）

SB４（第17図、PL.６）

B区O10グリッド、標高15.4m～15.5mに位置する。６基以上の柱穴で構成され、東西に３間、南北に１間を検出した。柱間は南北に1.8m、東西に1.6mである。柱穴は抜き取り穴が付属している。方位は北で西にわずかに（N-４°-E）ふれる。出土遺物はなく時期は不明である。また、SB５と重複しているが、柱穴の切り合いはなく新旧関係は明らかにできない。　（鈴木）

SB５（第16図、PL.６）

B区O10グリッド、標高15.5m～15.6mに位置する。３基の柱穴から構成され、それぞれの柱間は2.3mである。柱穴列は東で北に（N-６°-E）ふれる。北側が破壊されており全形は不明だが、検出した３基の柱穴の東に続く東西棟か、３基を南限として北側に桁が通る南北棟である可能性が考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。　（鈴木）



第20図　SD1

第21図　SD2

SA１（第18・19図、PL.９）

B区P11グリッド、標高15.1～15.3mに位置する。４基の柱穴が一列に三間分並ぶ柵列である。柱間は1.8m、柱穴の深さは0.51m～0.33mである。B区の掘立柱建物跡とは方位が一致せず、西で北にやや大きくふれる(N-７°-E)。遺物は、柱穴Ｐ19の埋土中から10、11の２点が出土した。11は土師質土器の坏底部で、底外面は回転糸切未調整である。他の出土遺物との関係から、平安時代前期のものである可能性を考えておきたい。(鈴木)

（４）溝

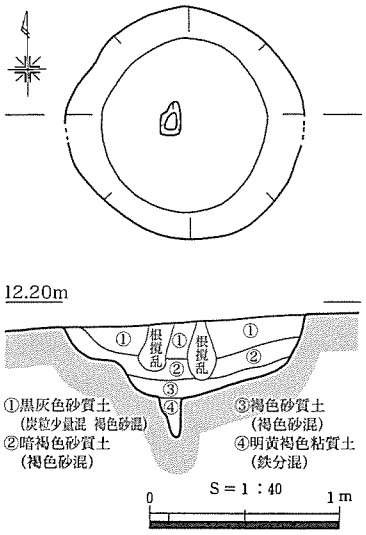
SD１（第20図、PL.６）

Ａ区Ｅ2～Ｅ5グリッド、標高13.2～11.7mの緩斜面に位置する。主軸はほぼ東西方向で、西端は調査区外へとのびている。検出した長さは約32mである。幅は1.0～1.4m、深さは15～20cmで、断面はおおむね逆台形を呈する。底面の標高は、東端で13.1m、西端で11.5mであり、西端が約1.6m低い。埋土は暗褐色土を主体とし、上層には包含層である黒灰色土が堆積する。また、西端付近では埋土に砂が混じり、水が流れていた可能性がある。埋土中から、土師器・須恵器片が十数点出土した。いずれも小片であり図化に耐えず、時期の特定は困難である。　(君嶋)

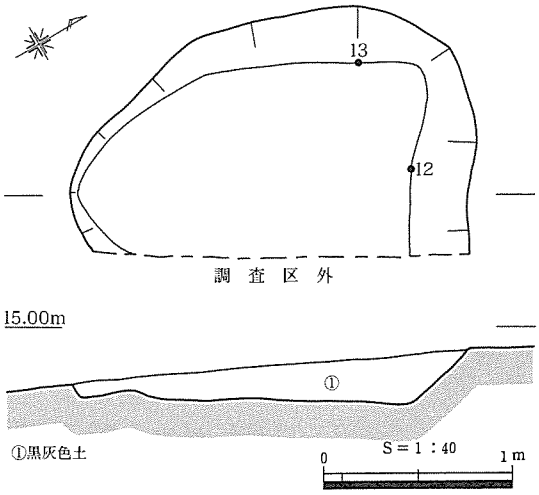
SD２（第21図、PL.６）

Ａ区Ｆ5・Ｇ5・Ｈ5グリッド、標高12.8～11.9mの緩斜面に位置する。ほぼ正確な南北方向に直線的にのびており、検出した長さは約23.2mであるが、南寄りの一箇所で約４mにわたって途切れている。幅は30～110cm、検出面からの深さは、南側では５cm程度、北側では15～20cmである。底面の標高は南端で12.8m、北端で11.8mであり、北端側が約１m低い。埋土は下層に褐色土、上層に包含層である黒灰色土が堆積している。砂の混入など流水の痕跡は窺えない。また、等高線に平行する走向からも、人為的に掘られた区画溝的な性格を想定できる。遺物は、埋土中より土師器、須恵器片十数点が出土した。いずれも破片であり、時期を示す特徴に乏しい。ただし、SD１・SD２ともに、埋土の状況から黒灰色土の堆積開始時には完全に埋没していなかったことが窺える。したがって、両遺構の時期は平安時代前期を大きくはさかのぼらないものと考えられる。

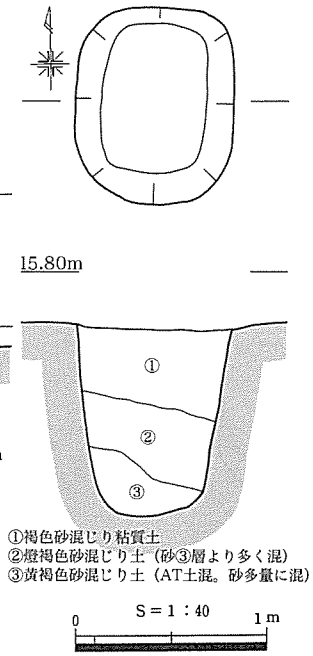
(君嶋)



第22図　SK１



第23図　SK２



第24図　SK３

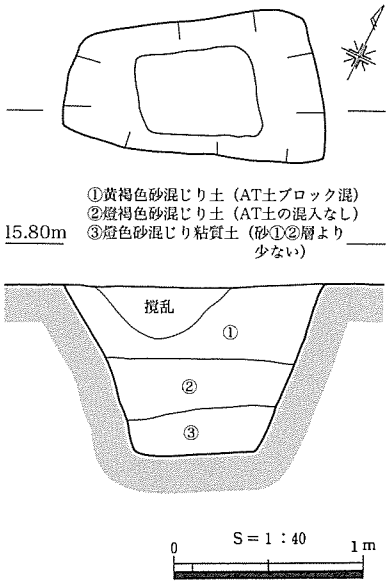
（５）土坑

SK１（第22図、PL.７）

A区D4グリッド、標高約12.1m付近に位置する。径約1.2mの円形を呈する。検出面からの深さは最大で0.6mである。底面ピットをもつことから落とし穴と考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。（鈴木）

SK２（第23・26図、PL.７・９・10）

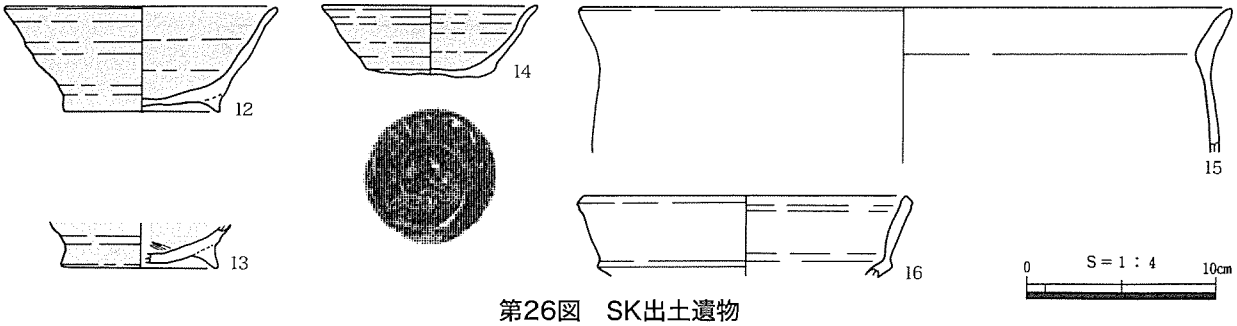
B区Q10グリッド、標高15.3～15.0mの緩斜面に位置する。東側が調査区外にかかっているため全体の形状と規模は不明であるが、検出した範囲では長軸2.1m、短軸1.3mの不整楕円形を呈する。検出面からの深さは、最も残りのよい北側で約30cmを測る。埋土は黒灰色土の単層である。底面から約５cm浮いた埋土中より土師質土器の坏12～14が出土した。これらは伯耆国庁編年第２段階（９世紀後半）に位置づけられる。（君嶋）



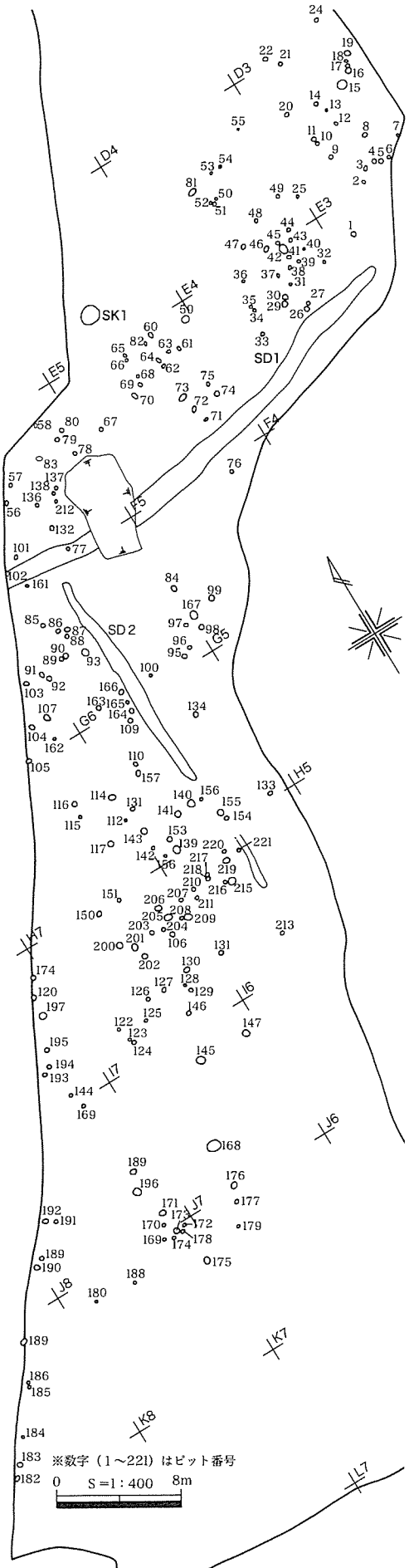
第25図　SK４

SK３（第24・26図、PL.７・９）

B区P10グリッド、標高15.4m付近に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺約1.0m、短辺0.9m、検出面からの深さ約1.0mである。埋土は白色砂が大量に混じるローム土を主体とする。土層も自然堆積とは考えにくいことから、白色砂の堆積開始以降に掘削され、人為的に埋め戻された遺構と考えられる。したがって黒灰色土を埋土とするSK２などよりも後出する可能性が高い。埋土中より甕形土器15が出土した。奈良～



第26図　SK出土遺物



第27図　A区ピット群全体図

平安時代の特徴を備えているが、混入遺物である可能性もある。　（鈴木）

SK４（第25・26図、PL.７・９）

B区P10グリッド、標高15.4m付近に位置する。平面形は台形を呈し長辺1.4m、短辺0.9m、検出面からの深さ約0.9mである。SK３と同様に、白色砂の堆積が始まって以後の掘削を受け、人為的に埋められたと考えられる。埋土中より古墳時代前期の甕形土器14が出土しているが、混入遺物であろう。　（鈴木）

（６）ピット群（第８・27・28図、PL.７・９）

A区で221基、B区で187基、計408基のピットを検出した。すべて第２遺構面での検出である。

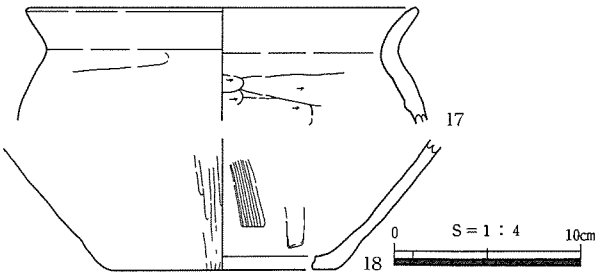
A区のピットの埋土は、ローム土系の暗黄褐色土と包含層である黒灰色土とに分けられ、時期が異なる可能性が高い。B区の埋土は殆どが包含層と同じ黒灰色土である。A・B区とも、柱痕の認められるものは殆どなく、配置に規則性は見られない。

遺物が出土したのは、A区では８基、B区では22基である。それらのうち、図示できたものは２点である（第28図17・18）。17は甕形土器口縁部で、古墳時代中期後半頃のものと考えられる。18は弥生時代前期～中期前半と考えられる甕もしくは壺形土器の底部である。外面は被熱しており、底面には焼成後の穿孔がなされている。

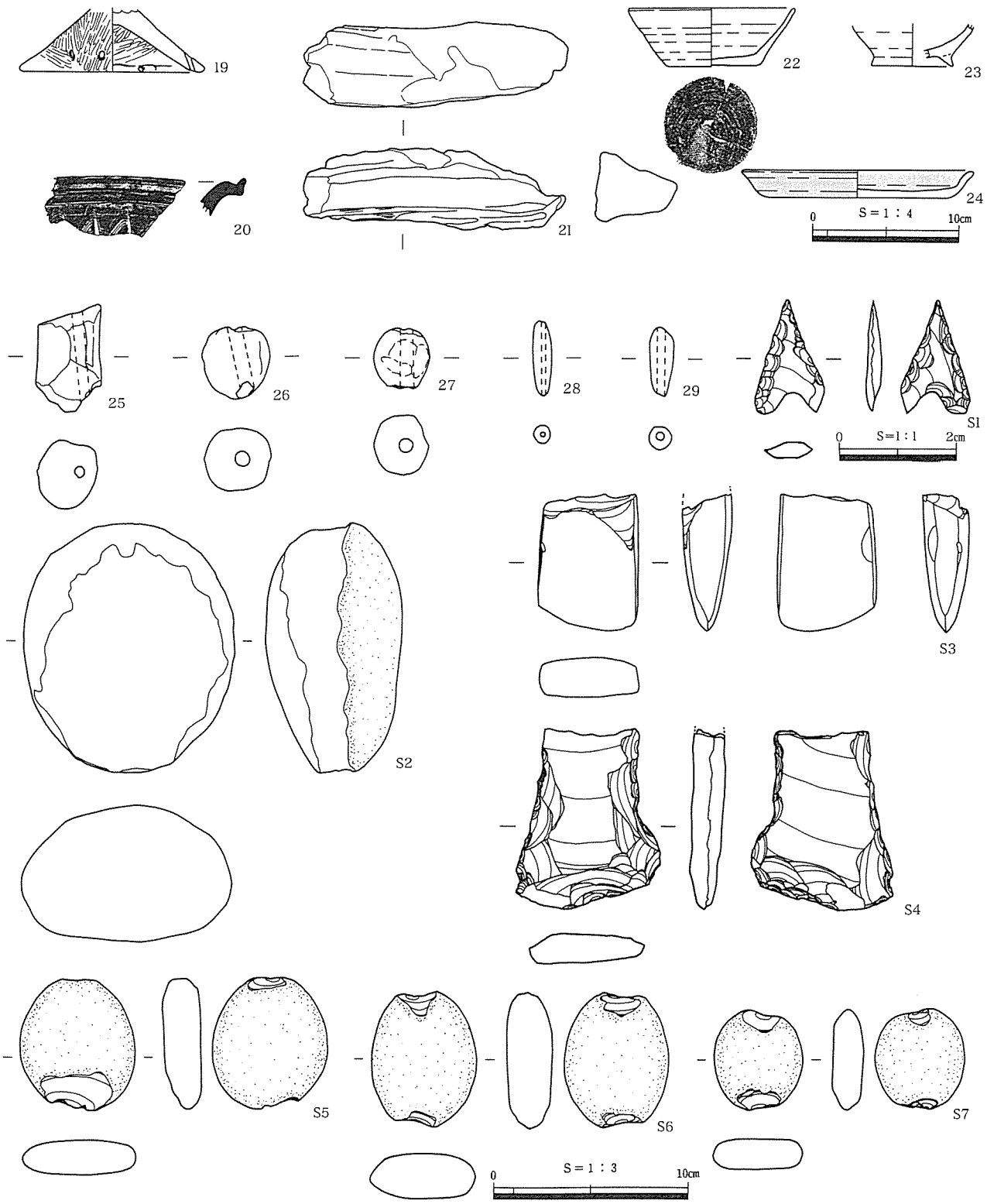
（君嶋）

第４節　包含層出土の遺物（第29図、PL.９～11）

黒灰色土からは、弥生時代～平安時代にかけての土器・石器が大量に出土しているが、殆どが小片である。19は弥生時代終末～古墳時代前期のものと考えられる蓋形土器で、裾部の２箇所に焼成前穿孔されている。21は移動式竈の庇部分。平安時代の土器は比較的遺存状態がよい。22の底面は回転糸切未調整である。須恵器の形態



第28図　ピット群出土遺物



第29図　包含層出土遺物

を模倣した土師質土器であり、伯耆国庁２段階のものと考えられる。24は赤彩された皿で、これも国庁１～２段階であろう。25は両端の欠損した柱状の土製品で、中央よりやや偏って孔が貫通する。Ｓ２は円礫の周囲を溝状に浅く打ち欠いている。片面は磨耗して滑らかであり、磨石を転用した錘かもしれない。Ｓ４は石鏃、Ｓ５～７は打欠石錘である。これらの石器はＳ３を除いて縄文時代の所産である可能性もあるが、出土遺物の中に縄文土器は確認していない。　（君嶋）

No.	遺構・地区 層位	挿図 PL	器　種	法量 〔cm〕	残存率	調整	色調	胎土	備考
1	SI 1 埋土中	第11図 PL.10	土師器 甕	口径※13.7 器高△19.7	口縁部1/10以下 肩部1/4	外面：横・斜位刷毛目 内面：ヘラケズリ	灰白色	径２㎜以下の砂粒を少量含む 密	胴部外面に煤付着
2	SI 1 埋土中	第11図 PL.10	土師器 甕	口径※13.8 器高△14.2	口縁部1/10以下 肩部1/4	外面：横・斜位刷毛目 内面：ヘラケズリ→ユビナデ 指頭圧痕	外）橙色 内）黒褐色	径２㎜以下の砂粒を多く含む 密	
3	SI 1 埋土中	第11図 PL.9	土師器 甕	口径※17.2 器高△8.6	口縁部1/8	口縁部：内外面ヨコナデ 肩部：外面ナデ、 内面ヘラケズリ	明黄褐色	径１㎜以下の石英、砂粒を やや多く含む 密	肩部外面に煤付着
4	SI 1 埋土中	第11図 PL.8	土師器 甕	口径※16.0 器高△7.0	口縁部1/3	口縁部：内外面ヨコナデ 肩部：外面ナデ、 内面ヘラケズリ	明黄褐色	径１㎜以下の砂粒を少量含む 密	
5	SI 1 埋土中	第11図 PL.8	土師器 甕	口径※12.8 器高△9.5	口縁部1/3	口縁部：内外面ヨコナデ、 肩部：外面縦刷毛目→横刷毛目→ ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙色	精良　密	
6	SI 1 床面	第11図 PL.9	土師器 甕	口径※14.6 器高△3.6	口縁部1/10以下	内外面：ヨコナデ	明黄褐色	径１㎜以下の砂粒を少量含む	
7	SI 1 埋土中	第11図 PL.8	土師器 山陰型甑	狭口径17.8 広口径40.7 器高60.3	完形（片側の 上下把手欠損）	狭口部：内外面ヨコナデ、 内外面：縦刷毛目→広口部 横刷毛目	浅黄橙色	径１㎜以下の砂粒を わずかに含む　密	
8	SI 1 床面	第11図 PL.8	土師器 山陰型甑	狭口径12.2 広口径29.0 器高53.6	完形	狭口部：内外面ヨコナデ、 外面：縦刷毛目→広口部ナデ、 内面：ヘラケズリ→ナデ、 広口部横・斜位刷毛目	橙色	砂粒を多く含む　　密	外面に黒斑あり
9	SI 1 埋土中	第11図 PL.8	土師器 山陰型甑	狭口径12.1 広口径27.9 器高44.0	完形	外面：縦刷毛目→横刷毛目、 内面：縦刷毛目→ヘラケズリ、 狭口広口部：内外面ヨコナデ	橙色	径４㎜以下の砂粒を含む 密	
10	SA 1　P19 埋土中	第19図 PL.9	土師器 甕	口径※21.0 器高△4.4	口縁部1/8	外面：口縁部横刷毛目→ナデ、 肩部ナデ　内面：口縁部ナデ、 肩部ヘラケズリ	にぶい黄橙色	径１㎜以下の砂粒、 角閃石を含む	
11	SA 1　P19 埋土中	第19図 PL.9	土師質土器 坏	底径※5.1 器高△1.3	底部1/3	内外面：ナデ 底外面回転糸切痕	明黄褐色	角閃石を含む	焼成やや不良
12	SK 2 埋土中	第26図 PL.10	土師質土器 高台坏	口径※14.0 底径8.4 器高5.6	口縁部1/10以下 底部完存	内外面：回転ヨコナデ 底外面に板圧痕	橙色	径１㎜以下の砂粒、角閃石、 金雲母を含む　密	内外面赤彩 底面に貼付高台
13	SK 2 埋土中	第26図 PL.9	土師質土器 高台坏	底径※7.9 器高△2.4	底部1/3	内外面：回転ヨコナデ	橙色	径１㎜以下の砂粒、角閃石、 金雲母を含む　密	内外面赤彩 底面に貼付高台
14	SK 2 埋土中	第26図 PL.10	土師質土器 坏	口径※11.1 底径6.7 器高3.8	口縁部1/3 底部完存	内外面：回転ヨコナデ 底外面：回転ヘラケズリ→ 板圧痕	橙色	径１㎜以下の砂粒、角閃石、 金雲母を含む　密	内外面赤彩
15	SK 3 埋土中	第26図 PL.9	土師器 甕 口縁部	口径※34.6 器高△7.7	口縁部1/8	内外面摩滅	にぶい橙色	径２㎜以下の砂粒を 多量に含む　密	
16	SK 4 埋土中	第26図 PL.9	土師器 甕 口縁部	口径※17.2 器高△4.3	口縁部1/10以下	内外面：ヨコナデ	浅黄色	精良　密	
17	B区P100 埋土中	第28図 PL.9	土師器 甕 口縁部	口径※20.2 器高△6.0	口縁部1/8	口縁部：内外面ヨコナデ 肩部：外面ナデ、内面ヘラケ ズリ	明赤褐色	１㎜以下の砂粒、石英、 角閃石を多量に含む　密	
18	A区P199 埋土中	第28図 PL.9	弥生土器 甕底部	底径※12.5 器高△6.8	底部1/3	外面：縦ヘラミガキ 内面：縦刷毛目	橙色 暗褐色	３～５㎜角の小礫をまばらに 含む　密	外面被熱、煤付着 底面に焼成後穿孔
19	Hライン 黒灰色土	第29図 PL.10	蓋	口径※11.7 器高△4.3	頂部つまみ欠損 裾部1/10以下	内外面：ヘラミガキ	外）浅黄色 内）黒褐色	径１㎜以下の砂粒、 雲母をやや多く含む	裾部に焼成前穿孔２孔
20	E 4 黒灰色土	第29図 PL.9	須恵器 甕 口縁部	器高△2.6	口縁部1/10以下	内外面：ヨコナデ 外面に櫛描波状文	灰色	精良　密	
21	D 2 黒灰色土	第29図 PL.9	竈	—	庇部のみ	上面・正面：ナデ 下面：板ナデ	橙色	径２㎜以下の砂粒、 角閃石を多く含む　密	
22	F 5 黒灰色土	第29図 PL.10	土師質土器 坏	口径※11.3 底径6.5 器高4.0	口縁部1/4 底部完存	内外面：回転ヨコナデ 底外面：回転糸切痕	にぶい黄橙色	径１㎜以下の砂粒、雲母、 角閃石を含む　密	
23	E～Fライン 黒灰色土	第29図 PL.9	土師質土器 高台坏	底径※4.7 器高△2.9	底部1/3	内外面：回転ヨコナデ	橙色	径２㎜以下の砂粒、 角閃石をわずかに含む　密	底面に貼付高台
24	H 6 黒灰色土	第29図 PL.10	土師質土器 皿	口径※15.4 底径※12.2 器高1.8	口縁部1/10	内外面：回転ヨコナデ	橙色	角閃石を微量含む　密	内外面赤彩
25	E 4 黒灰色土	第29図 PL.11	柱状土製品	長△5.5 径3.3 孔径0.5	—	外面：ナデ	浅黄色	径２㎜以下の砂粒、 角閃石を含む　やや粗	中心からやや外側に 偏って焼成前の貫通孔
26	E 4 黒灰色土	第29図 PL.11	土玉	長3.1 最大径3.4 孔径0.7	ほぼ完形	外面：ナデ	にぶい橙色	径１㎜以下の白色砂粒を含む	
27	E 4 黒灰色土	第29図 PL.11	土玉	長3.0 最大径3.0 孔径0.6	ほぼ完形	外面：ナデ	黒褐色	径１㎜以下の砂粒、雲母を 含む	
28	E 3 黒灰色土	第29図 PL.11	土錘	長△3.3 径0.9 孔径0.2	端部欠損	摩滅著しい	橙色	雲母、角閃石を微量含む　密	
29	A区 表土中	第29図 PL.11	土錘	長△3.5 径1.2 孔径0.4	端部欠損	摩滅著しい	灰黄褐色	径２㎜以下の砂粒を 多く含む　密	

出土遺物（土器・土製品）観察表

第４章　まとめ

中浜遺跡は、北条砂丘の砂に覆われた独立丘陵上に立地する。調査の結果、上下二面の遺構面が確認された。丘陵の基盤層をなす火山灰質土層の上面である第２遺構面では、竪穴建物跡３基、掘立柱建物跡５棟、柵列１条、溝２条、土坑４基、ピット（柱穴）408基を検出した。これらのうち、時期が明確なものはSI１、SK２、SA１である。

SI１は古墳時代前期後半の竪穴建物跡であり、完形の「山陰型甑形土器」が３個体出土した。１遺構からの出土数としては、米子市青木遺跡Ｈ区SI32[註1)]と並んで最多である。また、SI１の中央付近から出土した２個体については、遺構の廃絶後に意図的に破砕された状況を確認した。山陰型甑形土器の用途及び性格、あるいは住居廃棄に伴う儀礼的行為について考えるうえで貴重な資料となった。

SK２からは伯耆国庁編年２段階（９世紀後半）の土師質土器が出土した。また、SA１からはこれに後出すると思われる底部糸切未調整の土器が出土している。

時期不明の遺構のうち、SK１はその形態から落とし穴と考えられ、縄文時代のものである可能性が高い。SB１～５については、SA１との関係から、平安時代前期のものである可能性を考えておきたい。これらの掘立柱建物は、方位や柱穴の規模が一致するSB２～４の一群と、方位が大きく異なり柱穴が小型のSB１、柱穴の規模や埋土はSB２の一群と同様ながらSB４と重複関係にあるSB５、と３時期の変遷を想定できる。それぞれの前後関係は不明だが、SB２、SB３、SB４の３棟が方位を揃える時期が、建物群がもっとも整備された時期と考えられる。これら建物群の南側は地形が徐々に下降していることから、今回の調査で検出したのは建物群の南西隅に相当し、中心部は既に破壊されたＢ区の北側に展開していたものと考えられる。

第２遺構面上には黒灰色土が堆積している。その堆積時期は平安時代前期と考えられる。黒灰色土の上面（第１遺構面）では、畠跡と考えられる畝状遺構を検出した。この遺構は砂丘化の進行によって埋没したものと考えられるが、その時期については不明である。中浜遺跡の３km東方に位置する長瀬高浜遺跡の畠地が埋没したのは、^{14}Ｃ年代測定により15世紀以降とされている[註2)]。したがって、同様の気象条件下にあったと思われる本遺跡例についても同じ時期を想定すべきであるが、今回の調査で中世の遺物がまったく確認されていない点は注意される。

SK３、４は埋土に白色砂を含んでおり、その性格は不明であるが、砂丘化開始後まもなく掘られた遺構と考えられる。その後、当遺跡を舞台とした活動の痕跡はしばらく途絶え、その間に堆積した白色砂層は厚さ４ｍにも達する。やがて近現代に至り、Ｂ区は墓地として再び利用されるようになった。

（君嶋・田村・鈴木）

註１）青木遺跡発掘調査団編　1978　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』鳥取県教育委員会
註２）牧本哲雄編　1999　『長瀬高浜遺跡Ⅷ　園第６遺跡』鳥取県教育文化財団

No.	地区・層位	挿図　PL	種　類	特　　徴	長軸[cm]	短軸[cm]	厚さ[cm]	重量[g]	石　材
S1	Ｅ５ 黒灰色土	第29図 PL.11	石鏃	凹基式	1.95	1.2	0.25	0.5	ガラス質安山岩
S2	Ｄ３ 黒灰色土	第29図 PL.11	石錘	周囲を溝状に打ち欠く　片面が磨耗している	12.7	10.8	6.9	1,170	角閃石安山岩
S3	Ｉ７ 黒灰色土	第29図 PL.11	磨製石斧	基部欠損	△7.0	5.1	2.3	132	粘板岩
S4	Ｈ６ 黒灰色土	第29図 PL.11	石鏃	基部欠損	△9.1	7.3	1.65	136	板状安山岩
S5	Ｆ５ 黒灰色土	第29図 PL.11	石錘	円礫の長軸方向の両端を打ち欠く	6.7	5.9	1.9	102	安山岩
S6	Ｅ５ 黒灰色土	第29図 PL.11	石錘	円礫の長軸方向の両端を打ち欠く	6.9	5.4	2.3	110	安山岩
S7	Ｅ５ 黒灰色土	第29図 PL.11	石錘	円礫の長軸方向の両端を打ち欠く	5.1	4.0	1.5	46	安山岩

出土遺物（石器・石製品）観察表

1．SI 1 出土　山陰型甑形土器集合

写真図版目次

PL. 1　1．SI 1 出土　山陰型甑形土器集合

PL. 2　1．遺跡周辺の地形（北から）
　　2．遺跡周辺の地形（南西から）

PL. 3　1．畝状遺構（南から）
　　2．SI 3（南から）
　　3．SI 1（南東から）

PL. 4　1．SI 1　甑形土器(8)出土状況（北東から）
　　2．SI 1　甑形土器(7・9)出土状況（北東から）

PL. 5　1．B区完掘状況（南から）
　　2．SB 2（北西から）
　　3．SB 3（南東から）

PL. 6　1．SB 4・5（南から）
　　2．SD 1（東から）
　　3．SD 2（南から）

PL. 7　1．SK 1（南東から）
　　2．SK 1 土層断面（南東から）
　　3．SK 2（西から）
　　4．SK 2 遺物出土状況（西から）
　　5．SK 3（南から）
　　6．SK 4（南から）
　　7．A区北端ピット群（南東から）

PL. 8　1．SI 1 出土遺物

PL. 9　1．遺構・包含層出土遺物

PL.10　1．SI 1 出土遺物
　　2．SK 2 出土遺物
　　3．黒灰色土包含層出土遺物

PL.11　1．石器
　　2．土製品
　　3．石錘
　　4．甑形土器（7）積み上げ停止面

1．遺跡周辺の地形（北から）

2．遺跡周辺の地形（南西から）

1．畝状遺構（南から）

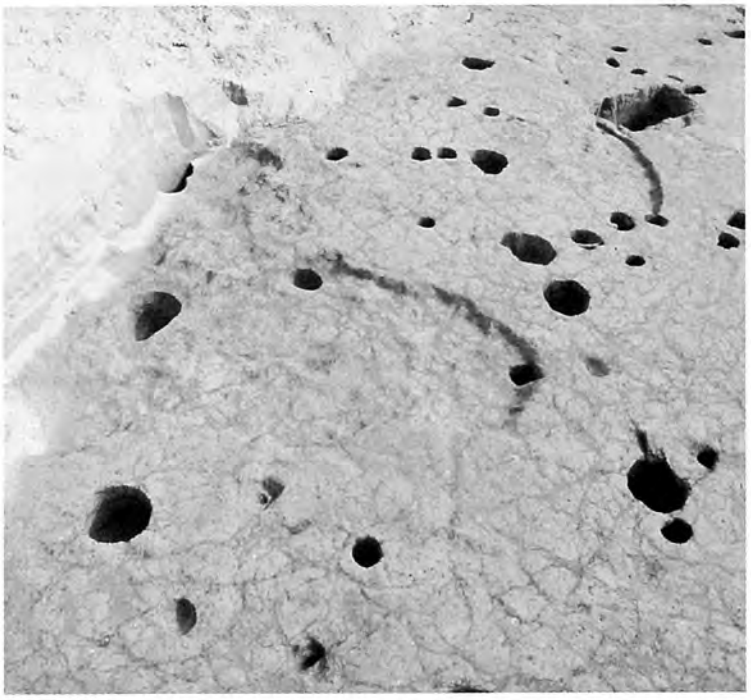
2．SI3（南から）

3．SI1（南東から）

1．SI1　甑形土器（8）出土状況（北東から）

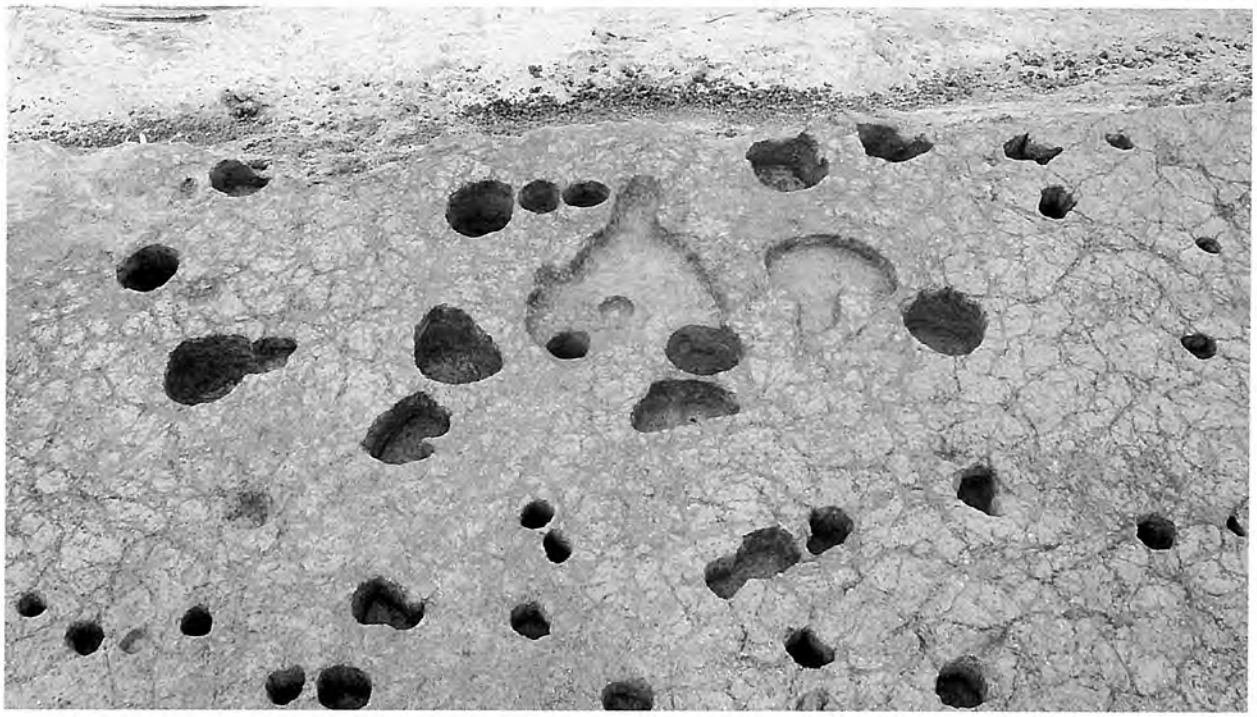
2．SI1　甑形土器（7・9）出土状況（北東から）

1. B区完掘状況（南から）



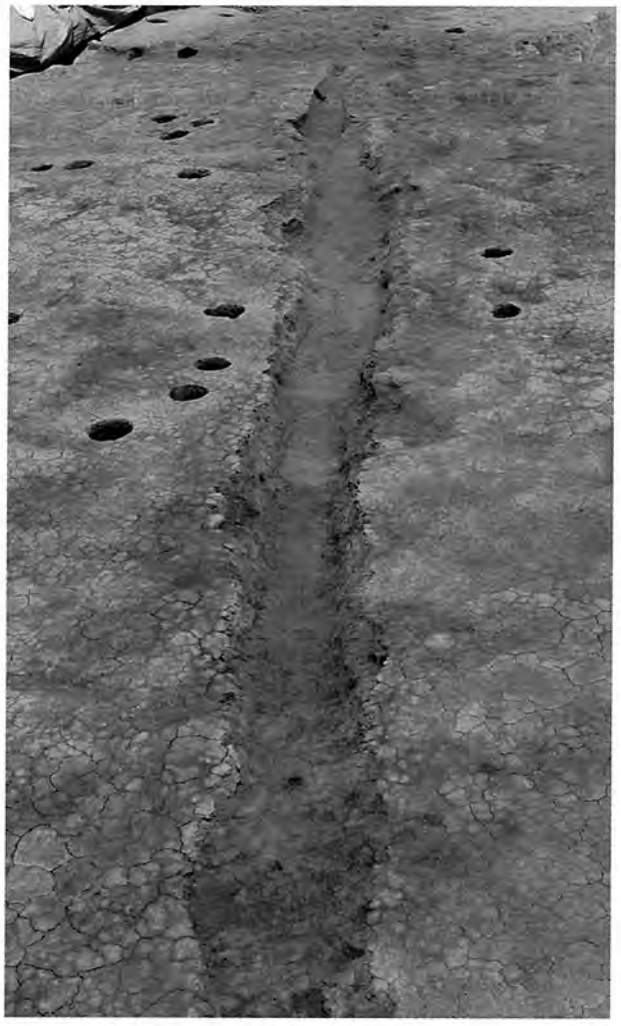
2. SB2（北西から）

3. SB3（南東から）



1．SB4・5（南から）

2．SD1（東から）

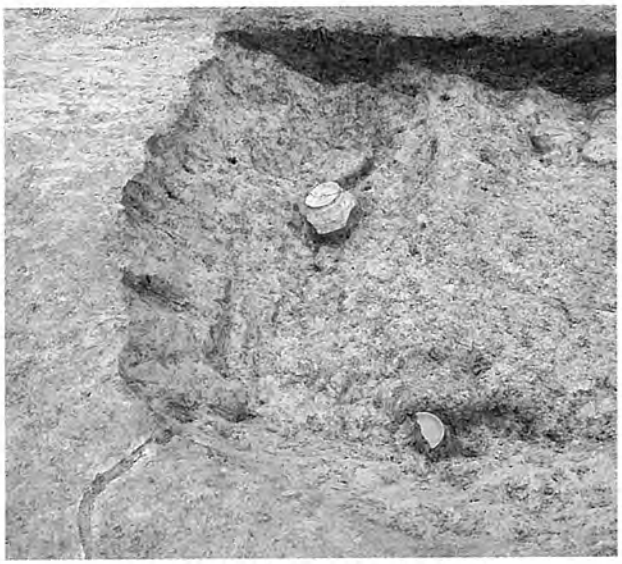


3．SD2（南から）

1．SK1（南東から）

3．SK2（西から）

2．SK1土層断面（南東から）



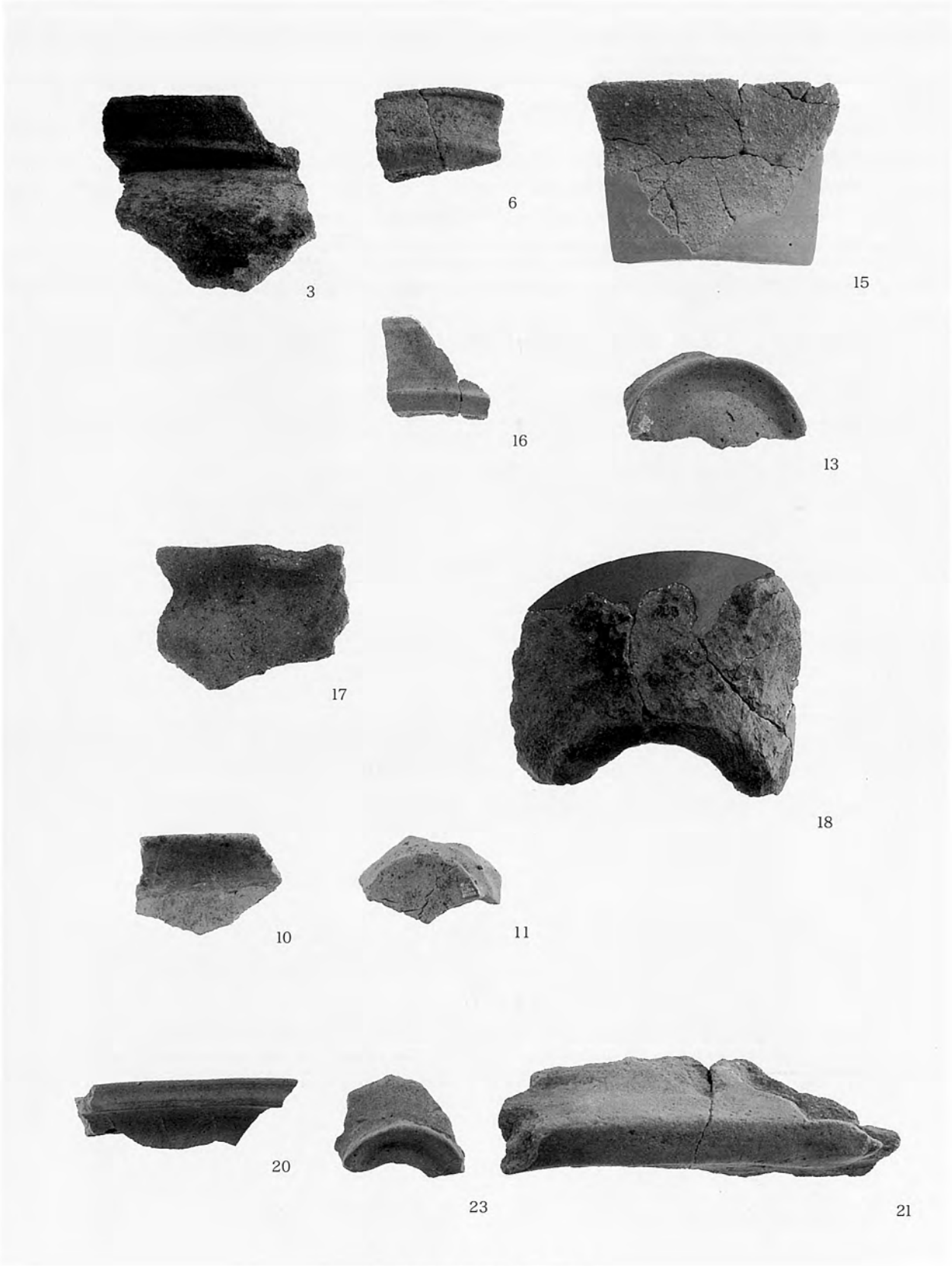
4．SK2遺物出土状況（西から）

5．SK3（南から）

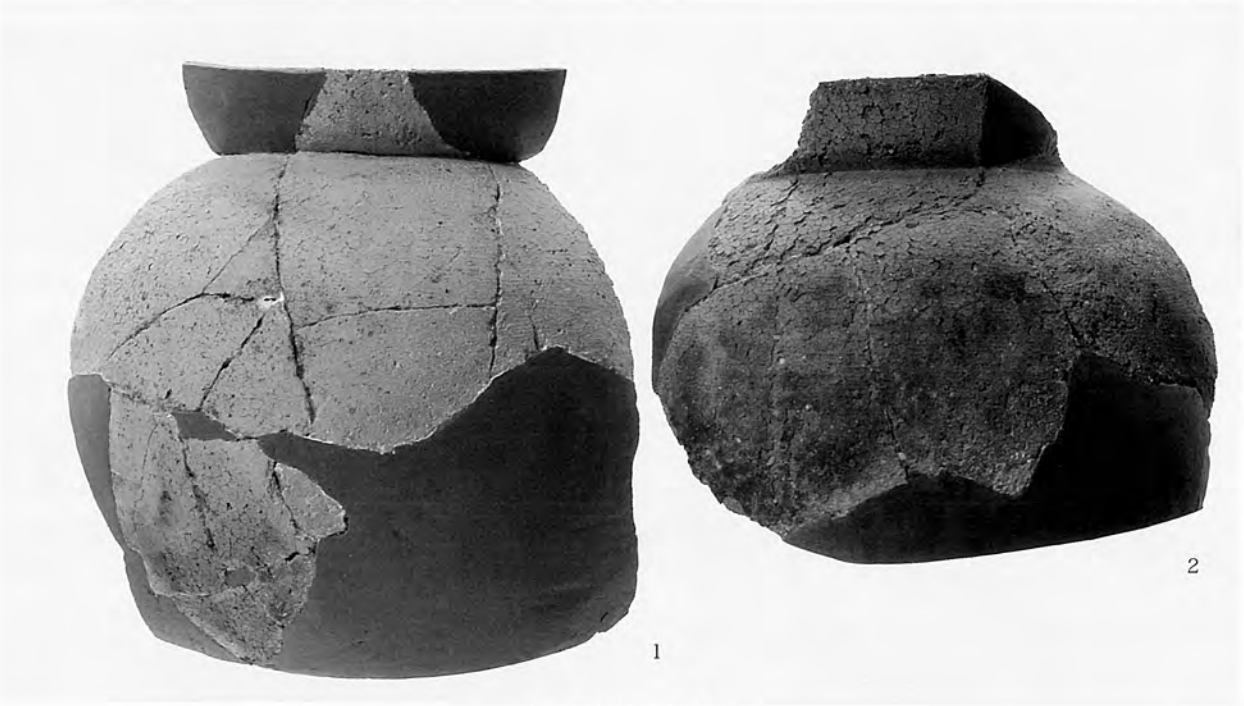
6．SK4（南から）

7．A区北端ピット群（南東から）

1．SI1出土遺物



1．遺構・包含層出土遺物

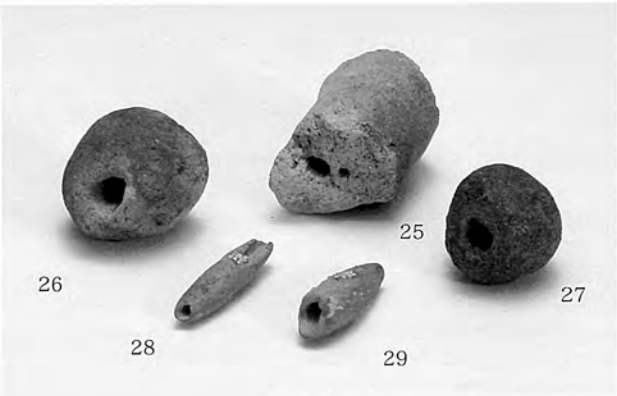


1．SI1出土遺物

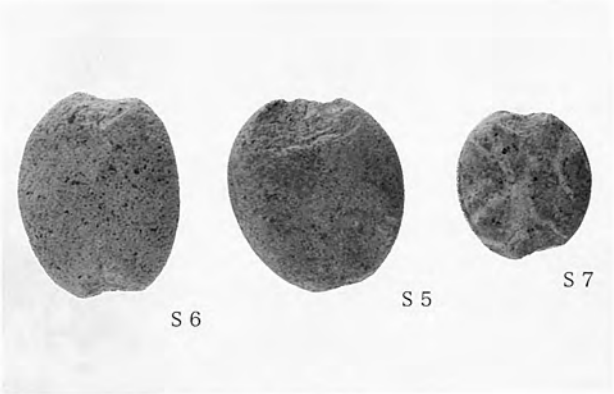
2．SK2出土遺物

3．黒灰色土包含層出土遺物

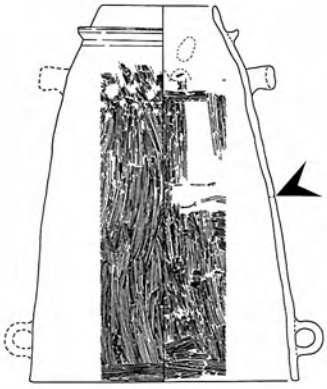
1．石器



2．土製品



3．石錘



4．甑形土器（7）積み上げ停止面（左図矢印）

粘土の接着力を高めるため、積み上げ停止面に刻みを施している。

報告書抄録

ふ り が な	なかはまいせき
書　　名	中 浜 遺 跡
副 書 名	一般国道313号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	92
編 著 者 名	君嶋俊行、田村昭夫、鈴木恵介
編 集 機 関	財団法人　鳥取県教育文化財団　埋蔵文化財センター
所　在　地	〒680－0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260　TEL（0857）27－6717
発行年月日	西暦2004年（平成16年）３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中浜遺跡（なかはまいせき）	鳥取県東伯郡（とっとりけんとうはくぐん） 北条町弓原（ほうじょうちょうゆみはら） 字中浜（あざなかはま）738－1他	31366	518	35°29′24.8673″	133°48′48.0192″	20030422 ～ 20030731	10,194㎡	一般国道313号 道路改良工事

所収遺跡名	種 別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項
中 浜 遺 跡	集落	古墳時代 前　　期	竪穴建物跡	土師器	山陰型甑形土器 ３個体出土
		平安時代 前　　期	土坑、 掘立柱建物跡	土師質土器	掘立柱建物跡５棟
		時期不明	土坑、溝、 畝状遺構		畝状遺構は畠跡の 可能性が高い
	包含層	弥生時代～ 平安時代前期		弥生土器、土師器、 土師質土器、石器	

鳥取県教育文化財団調査報告書92

一般国道313号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡北条町

中浜遺跡

発　行　2004年３月31日
編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団
　　埋蔵文化財センター
　　〒680-0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260
　　電話　(0857)27－6717
発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団
印　刷　山本印刷株式会社